



特集：JIBSN 設立特別企画
「激論 北方領土問題 現場からの眼差し」



札幌エルプラザ（2011年11月27日）

* * *

JIBSN（境界地域研究ネットワーク JAPAN）設立特別企画

「激論 北方領土問題 現場からの眼差し」

2011年11月27日（日） 14:00-16:15

（企画趣旨）

北方領土問題が「危機」的な状況を迎えている。これまで様々な放送局が特番や討論番組をプロデュースしているが、政府交渉の経緯を追ったものが多く、現地の声や根室からのイニシアティブを踏まえて制作されたものはあまりない。本企画では、札幌を始めとする北海道民にもまた知られていない、北方領土隣接地域（根室管内）や元島民らの「闘い」の歴史を振り返るとともに、これらローカル・イニシアティブのあり方を検証することで討論を行う。



【司会】

中村美彦（フリージャーナリスト・HBC「一筆啓上」「無頼放談」キャスター）

国内外のあらゆるテーマを自在にこなす鬼才。特に対談でのアドリブによる挑発は一級品

【パネリスト】

金平茂紀（TBSテレビ執行役員・「報道特集」キャスター）

2010年より「報道特集」キャスター。現場に足を運ぶ直接取材にこだわる。

モスクワ特派員の経験があり、ロシア側から見た領土意識を知悉している

本田良一（北海道新聞函館支社報道部 編集委員）

著書に『密漁の海で』など。北方領土周辺水域安全操業、貝殻島コンブ漁など漁業問題に詳しい。

「北海道新聞」（夕刊）に続編を連載中

本間浩昭（毎日新聞北海道報道部・根室 記者）

共著に『知床・北方四島』『環境 設計の思想』など。

根室暮らし足かけ23年。その裏表を知り尽くした記者が環境問題からアプローチ

石垣雅敏（根室市副市長）

根室の多様な声を束ね、いかに中央に届けていくか。まさに行政のアイディアマン

鈴木寛和（千島歯舞諸島居住者連盟副理事長）

元島民組織千島連盟の顔。だが個人としての率直な物言いと発言にも定評あり

岩下明裕（北海道大学スラブ研究センター教授・討論コーディネーター）

著書に『北方領土問題』、『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』など。北方領土を分け合っ

て解決したらと問題提起を行い、一部メディアからは「平成の国賊」と非難

（付記）

- * パネリストはいずれも個人としての参加であり、その発言は所属組織やあらゆる団体の見解にかかわるものではありません。またパネリストはいかなる関係組織を代表するものでもありません。
- * 本討論会はすべてパブリックなものとして行われ、その模様はユーストリームで配信されています。
映像は https://www.youtube.com/watch?v=nuu_Ht-7gkE （第1部）
<https://www.youtube.com/watch?v=7xjnbBHUJbw> （第2部）
- * 本特集は、映像記録をもとに読みやすく編集されたものです。



「激論 北方領土問題 現場からの眼差し」によせて

2012年11月に札幌で、稚内、根室、小笠原、対馬、五島、竹富、与那国といった境界地域の自治体と研究者が一同に会したネットワーク（JIBSN：Japan International Border Studies Network：代表 外間守吉与那国町長）の設立会議を開催することを決めたとき、これにあわせて一般の方々に広くメッセージを発信できるようなイベントを開催したいと考えた。当初、世界の境界・国境地域に詳しい作家の方に講演していただく案もあったが、準備は一向にはかどらない。

そこで北海道という地にふさわしいテーマで、地元の視線で議論できる論客を集めてシンポジウムをやってみたらどうかというアイデアが生まれた。幸いにも、北海道放送（HBC）のラジオとテレビで長年キャスターを務めている中村美彦さんの全面的支援を受け、このような個性的で現場をよく知るジャーナリスト、行政、運動関係者による討論の場をつくることができた。

このようなイベントは、GCOEの企画を含めてしばしば行われるのだが、市民を交えたイベントの発信力はどうしても札幌周辺にとどまることが少なくない。この討論の模様をそのままのかたちで全国の多くの方々にみてもらいたいと考えた。プロに撮ってもらった映像をユーストリームで配信する。これがその答えだった。

激論をユーストリームに配信した後、数多くの関係者やこの問題に関心を寄せる方々から反応があった。北海道のローカル各局は北方領土問題で優れた作品を作ることが多いのだが、東京の研究者や関係者はそれを見ることが出来ない。このイベントをインターネットで配信した意味は大きかったと思う。プロの丁寧な作りがあってこそのことである。その意味でこの映像記録を作成したHBCフレックスならびに竹内陽一プロデューサーには心よりお礼を申し上げたい。

ただ時間をかけて映像をインターネットを通じて視聴できない方々も多くいることを考え、紙の上でも記録を残すことにした。映像記録をもとに再現した本特集は、若干、手を加えてあるが、議論の様子は可能な限り、再現してある。もっとも激しい議論の臨場感は紙では十分に伝わらない。本特集を見て、関心を持たれた方はぜひユーストリームでの生のやりとりをご覧いただきたい。

本企画の意義やその目的は、討論のなかで十分に説明してあるので、ここでは省略する。ひとつだけ述べておけば、北方領土問題は外交や政治交渉での議論ばかりが溢れており、それを現場に暮らす人々、また長年関わりをもってきた当事者たちがどのような思いでそれを受け止めているかはあまり知られていない。北方領土問題が政治の一つとして議論されるかぎり、それを聴い

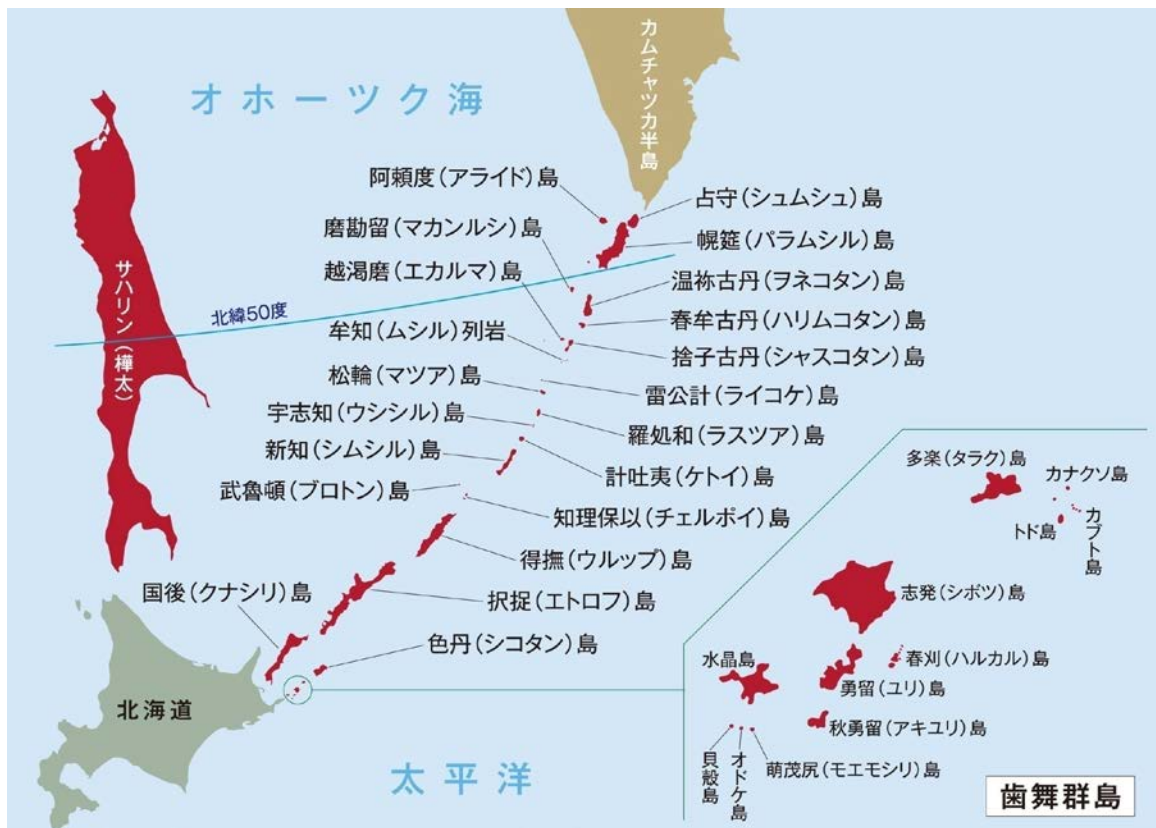


た人々は、やはり人ごとであり、自分の問題として向き合うインセンティブはもちにくいと私は思う。本特集では、北方領土問題にかかわる現場の前線で何が起こってきたか、また今何が起ころうとしているのか、という論点が浮き彫りになるように心がけた。本特集を通じて、多くの方々が当事者あるいは現場にとっての北方領土問題の意味を理解していただければ嬉しい限りである。

また設立間もない JIBSN の今後の活動についてもご指導ご支援を賜りたい。最後に、事前打ち合わせのほとんどない、がちなこライブでの討論に積極的に参加して下さったパネリストのみなさんと期待通りにこれを縦横無尽にさばいて下さった中村美彦さんに心よりお礼を申し上げたい。

なお、本討論への参加はすべて個人の資格でなされており、パネリストの意見は、その所属する、あるいは関係するいかなる組織や機関の考えを代表するものではない。

(拠点リーダー 岩下明裕)





2011年11月27日（日）札幌エルプラザ 14時

（中村美彦） こんにちは。皆様、ようこそお集まりいただきました。進行役を務めます中村です。どうぞよろしくお願いたします。（拍手）

それでは今回のこの催しの趣旨、そのほかにつきまして岩下先生からお話いただけますか。

（岩下明裕） 中村さん、ありがとうございます。今日はまたお忙しいところパネリストの方々、お集まりいただきありがとうございます。北方領土問題の討論の場をつくりたいと思いましたが、今年の1月にHTBであったと思うんですが『朝まで生討論』という番組に呼ばれまして、田原総一郎さんの司会で、結構、北海道目線の番組を作るということで羅臼の町長とか、それから千島連盟の小泉理事長とかが来られていまして、ちょっと北海道の目線で北海道のいろいろなことを考えながらできる番組にするんだろうなと思っていたんですが、東郷和彦さんが来られ町村代議士がおられ、そして森本さんという評論家の方がおられて、途中からまったく交渉の話になって、私はそれはそれで非常に面白かったわけですが、どうも隣に羅臼町長が座っていまして非常にストレスがたまっておられました。

そして小泉理事長に至っては、田原さんに怒鳴り上げられるというようなことがございまして、何とかちょっと違う形でこういうことをやりたいといろいろと考えました。それで中村さんといろいろ相談しながらこういう場をつくろうとして、本当は生中継でテレビでやりたいと思ったんですが、スポンサーが付かないのか、それともたぶん北方領土問題なんか関心がないんだと思うんですね、失礼ですけれども。ですから、こういう形で自由にやろうかということにしました。

今日も、私ははっきり言うところは300人が入るんですね。宣伝もいろいろして200人ぐらい来るかなと思ったんですが、さっき数えたら120人ぐらいですね。これがはっきり言いますと北方領土を考える人たちの限界と現実かなとあらためて思いましたが、かえって討論しやすい雰囲気になるんじゃないかと思います。

それで、今日はお手元にピンクのチラシがあると思いますが、せっかくこういう場ですのでライブでやりますのでユーストリームで配信することを考えています。後でそういう場を中村さんがつくってくださるかどうかは中村さんの判断ですが、パブリックな催しですから質問されたり、やりとりも含めてユーストリームで流れることとなりますので、その点はお含み置きください。つまりパブリックの場で議論するということは、参加される方全員が議論に対して、それぞれ責任を持ってやるということだと考えています。

それから今日のパネリストの紹介は省きます。ただ、これは根室副市長とか、千島連盟の副理



事長とか、メディアとか、肩書が付いておりますが、今日この場にお呼びしたのはすべて個人としてお呼びしています。そしてこれは個人として自由に発言していただきたい。どこかの組織や団体の利益を代表して、私もそうですけれども議論するものではない、逆に北方領土問題を含めて考えていることをできる限りストレートに議論する場にしたいということです、この2点についてはあらかじめ、お含み置きいただきたいと思います。それでは中村さん、あとはよろしくお願いします。

(中村) そう言われても何とも言いようがないんですけども、これだけ皆様、ご紹介の方がお集まりですし、せっかくの機会ですから内容の濃いものにさせていただければと思っています。鈴木さん、これだけはぜひ最初に言っておきたいということがあればどうぞ。

(鈴木寛和) 皆さん、こんにちは。私は歯舞群島の勇留島の出身です。当時、私がいたころは502名ぐらいの住民がおりましてし、戸数にして79戸ぐらいの住民の方が住んでおりました。もうすでに戦後、67年目を迎えてもう終わろうとしています。私も自由訪問で2回行ってまいりましたけれども、島はもうもぬけの空で今、ロシアの国境警備隊は1人もおりません。私も自分の息子を連れて、今、自分が元気なうちに島の様子や、さらにまたこの後の返還運動に少しでも寄与していただけるように後継者を育てたいという意味もありまして行ってきましたけれども、そのときに息子がたった一言、「何でこんな小さな島をロシアは返さないんだと、これはもう絶対に返してもらわなきゃだよ」と。その息子は初めて島に渡航したわけですけども、今、後継者がそういう思いに立っているということだけは皆さん、少しでもご理解いただきたい。これをまた大きな輪としてこれからの返還運動をさらに続けてまいりたい。今、早期返還と言ってもなかなか難しいという局面もありますので、少なくとも四島一括返還を唱えたいと私は考えております。以上です。

(中村) 本田さん、今、鈴木さんがお話しになったことに絡んでいくと、何でこんな小さい島が返ってこないんですか。

(本田良一) それはロシア大統領に聞かないと分からないと思うんですけども、今、私はずっと、昭和63年の秋から3年弱根室にいて、その後もずっと領土問題に関して取材をやってきて思うのは、鈴木さんみたいに元島民の方は4島を返してほしいと。今、一括とおっしゃいましたけれども、丸ごと返してほしいとよく言われる。それで拿捕事件とか銃撃事件があると領土問題



が解決してないからだ、4島が返ってくればこういう問題も起きないと。だから領土問題を早く解決しないといけないということになるんですけども、実は4島が返ってこないから、この地元というか、根室という視点から見ると非常に苦しんでいるのかというところではなくて、1島でも、2島でも、3島でも、4島でもいいんですが、要するに何らかの形でこの国境線が引かれると、根室というところは非常に元気になるといいますか、例えば今、島に渡ろうと思ってもビザを取って行くわけにもいかない。漁業をやろうとしても、協定を結んでお金を払ってとらせてほしいと言っても、今一部はあるんですけども、そういう経済交流もまったくできないということで、地元といわゆる東京レベルというか、札幌も同じだと思うんですけど、領土問題が解決しないというのは4島が返ってこないということではなくて、例えば2島でも返ってきたら地元はかなり息を吹き返すというところがあるんですね。その辺がうまく伝わってない。

つまり、白でもない、黒でもない、あそこの海はずっと灰色のままなんです。灰色のままなのでいろいろと商売もできない。普通、国境の町というのはどこもそうですけど、交易によって非常に栄えるというか、今の稚内なんかを見ていると分かると思うんですが、稚内も正式に言うところでもまだ国境線は確定してないんですが、いろいろとフェリーを行き来して何とか可能性を探ろうとしているんですが、それが根室の場合できないというところが非常に厳しいところだと思います。そこがちょっと地元の視点から見るとちょっと違うかなと、よく理解されてないところかなと思います。

(中村) 本間さん、いかがですか。

(本間浩昭) 私も地元は苦しんでいるかということに対して「ノー」だと言った本田さんの発言、その通りだと思います。実は領土が返ってこなかったからこそ、これまでアンダーグラウンドな経済を行うことができたのだと。つまり特攻船がいたり、レポ船がいたり、ある意味で水面下の経済がこの根室という土地を支えていた時期があります。今も支えています。つい10月の半ばですか。ハナサキガニ16トン積んだ船がロシア側に拿捕されました。その翌日あたりから根室市内はカニがまったくなくなりました。つまりそれぐらいもう北方四島のアンダーグラウンドな経済によって、根室の浮沈が懸かっているぐらいな、ちょっと大げさに言うところなんです。

昔は何百億円というお金がアンダーグラウンドな形で市中経済を潤して、それがだんだんと海が狭くなってきて、アンダーグラウンドな操業ができなくなった。例えば、現在はインマルサットでずっと追跡されています。これまでは濃霧の中で操業していたんだけど、いまはきっちり神



の目で見られている、そういう状況になって、いよいよ困ったなというときに領土問題を出してきたわけです。「根室は領土問題があるから苦しいんだ」と。そういうエクスキューズをするわけですね。ある意味で政府はキャッシュディスペンサーのような役割をしまして、領土問題で苦しんでいるからといえば、新しい市立病院の建て替え財源として国からいろいろな形で交付金が出たりしています。だから地元は苦しんでいるかという、やはりそうではないところもある。でも相対的に見れば、かなりこのところ落ち込んでいて、ダンス預金もなくなり、そしてスナックも食堂も、レストランも、銭湯も、その辺の小売店から何から、これまで10あったものが7か6ぐらいになってしまっている、という苦しさはあります。

(中村) ありがとうございます。石垣さん、今日、先ほど岩下先生がおっしゃったように個人の方のご発言をいただくことをぜひお願いしたいと思っておりますが、やっぱり四島一括返還じゃないといけないんですか。



(石垣雅敏) 個人の立場で言わせていただきます。私は確かにゴルバチョフからエリツインになったところが返還の可能性が一番近かったと思いますけれども、その次に近いのは私はイルクーツク宣言のときだったと思います。それは四島一括返還ではない、56年宣言があるんだから56年宣言とそれと残りの2島をしっかりと話し合おうということですから、私は四島一括返還が根室に、また日本にすぐ四島一括返還で返るということにはならないし、また千島連盟の四島一括返還というのも、そういう意味ではないと認識をしています。



(中村) 金平さん、今まで皆さんが一応お話しになりました。ここまでお聞きになっていたご感想と、金平さんはソビエト、ロシア、そこに深くコミットされていた報道の立場も踏まえて、いろいろなことがあると思うんですが、いかがですか。

(金平茂紀) 今日はこういう場にお招きいただいて何を話そうかと思っていたんですが、私がたぶんここにいるのは中村さん、岩下さんから呼ばれてきた理由は何しろ北海道出身で、私は旭川生まれなので、そこに北海道については多少の愛着があるだろうということ。それから1991年から1994年までモスクワ特派員だったものですから、そのときはちょうどゴルバチョフからエリツィンに代わっていったときです。エリツィンになってから、彼は領土問題は存在をしていて、何らかの進展をつくろうということに対しては非常に積極的でした。当時、カウンターパートナーが橋本龍太郎だったんですけど、そこで進んでいたものをモスクワサイドから見ていたものですから。

というのは、ロシアの人たちがどういう意識を持っているかという、領土問題とか、領土交渉というのは、つまり相手がいる話なので、僕らの立場だけかというか、あるいは地元の立場だけを強調しても、主張しても相手がいることですから、相手がどう考えているかをまず見ないと何も始まらないわけです。

だって本当のことを言えば、あそこにたぶんロシアのメディアの方がいらっしゃっているのかわからないですけど、たぶんロシアの方ですよ。違いますか。席にもいっぱいロシアの方とかいらっしゃると思うので、そういう人たちが考えている北方領土問題と、僕らが考えている北方領土問題というのは違うんですよ。それはモスクワに暮らしているともうおのずと分かっちゃって、そうすると僕はモスクワにいながら日本から発せられる領土問題に関する主張とかを聞いているでしょう。そうするとものすごいずれを感じて、何を言っているんだろうと、そんなことを言ったって通じるわけがないじゃないかみたいなね。

今でも覚えているんですけど、あれは何年だったかな。モスクワ争乱というのがあって、エリツィンが議会派の立てこもる、向こうのホワイトハウスというところに戦車で砲弾をぶっ放すんですよ。中に立てこもった連中が何人か死んで、議会派を制圧するというモスクワ争乱事件というのがあったんですが、1993年でしたっけ。それがちょうど起きたときにエリツィンに日本訪問の予定の時期と重なっていたんです。モスクワ市内は内乱ですから内戦みたいになっていて、とんでもないことになっているときに、ちょうど僕はそのときモスクワ特派員をやっていたので、東京と生中継をやっていたんですが、一番最初に聞かれたのは、これでエリツィンさんは日本に来るんですかという話をするわけですよ、東京は、日本は。そんなことできるわけがないじゃな



いですか。だって自分の国がどうなるか訳が分からなくて、中で戦争が始まろうみたいな形で戦車で砲弾をぶっ放しているときにですよ。

つまり、それぐらい意識というのは違うんですよ。日本人たちが持っている北方領土問題というものとロシアの人たちが今、持っている北方領土問題、え？ みたいな、その意識の違いをまず認識するというのがものすごく大事で、それが認識できないと、何一つ僕は進まないと思うんですね。だから今日、僕は皆さんのお話を聞きながら、あるいは会場の皆さんのお話を聞きながら、北方領土問題というのはそもそも何なんだという話からいって、それが本当に解決すべき問題というのは、誰のために、何のために、そういうことを僕らはこういう議題として取り上げるんだろうかということが、僕は一番根本的な問題だと思っています。

なぜこんなことを言うかということ、今年は特別な年だからです。それは国策というものが、いかに何も考えないまま国策に従っていくととんでもない間違いをしてしまうということを僕らは思い知った年だからです。国策というものをまったく疑わない、運動をやっている人たちとか、思いをずっと強めている人たちにとってみると国策だと。つまり北方領土返還は国民の悲願だというのは国策ですよ。それを疑ってみる視点というのを僕らは今年、初めて実は持ったんです。言っているのは原子力のことですけどね。

そういうことを自分たちに自問してみるいい機会が、今、僕らに訪れているんだろうと思っているので、非常にざっくりしたことを私は言っていて、具体的な話は皆さんの方からむしろ教えていただきたいぐらいで、そういう立場で皆さんのお話をお聞きしたいな今日は思っています。

(中村) 岩下先生、北方領土問題というのはロシアの人たちにとっては存在しているんですか。

(岩下) 北方領土問題という言い方は知っていますが、それは日本が作った言い方だと彼らは思っていると思います。日本が領土の主張をしていることは知っていて、それは申し訳ないけど、フルシチョフが2島を渡すと言ったとか、ゴルバチョフが4つは協議の対象だと言ったとかで、余計なことをしやがってと、できればなしにしたいということなんだろうと思いますね。

金平さんの話を聞いて私が思ったのは、東京とモスクワの話のずれというのがあるんですけど、東京の人は領土問題、領土問題って、たぶんロシアから見るとまたその話かという話なんですけど、じゃあ、東京の人に領土問題と言ったって、どこの領土なのか本当に知っているのかということ、地図を見ると歯舞というのはあんなにたくさんあるということだし、鈴木さんは勇留島ですよ。歯舞は1つじゃないんだよみたいな話もあるし、貝殻島を皆さん納沙布に行くときに見ますけど、横にある萌茂尻島というのは、あんなの知らないぞとかって要するに何も知らないで、ただ



頭の中で言っているということがあるんじゃないでしょうかね。

ですから、その延長で固有の領土なんていう議論も出てきて、固有の領土というのは非常に内向きな議論で、さっきの金平さんの議論でいうと、東京とモスクワのずれもあるけれども、自分たちが考えていることをそのまま言っても相手に通じない、説得力もないということをもう1回考えないといけませんね。日本語で「固有の領土」と言ったら、固有を辞書で引くと元来のとか、本来のと、もともとのと。そんなことを言ってももともと我々の領土ですかね。北海道だってもともと日本人の、大和のものですかって。沖縄だって固有ですかという話で、そういうことを考えてみればどうやって相手に固有の領土だから返せと言えるのかなという。もちろんロシアの固有の領土ではありませんよ。そういう話をやっぱりちゃんと考えて言わないといけないと思いますね。

(中村) 今、岩下先生がおっしゃったことをさらに受けて、金平さん、何かありますか。

(金平) 具体的な話を僕はむしろ教えていただきたいぐらいなんですけどね。例えばですけど、こういうことがあるんですよ。僕らはメディアに勤めているでしょう。メディアで外務省の記者クラブに所属していたりするんですね。今、ロシアの北方領土に渡る場合はロシア政府のビザを取って、向こうに行って仕事をするというのは、僕はメディアの人間だからそれはしょうがないなと思ってそうやりますよね。そうすると外務省記者クラブに制裁が加わるんですよ。つまりそのメディアとか、その新聞社とか、そのテレビ局はビザを取るということは、ロシアの領土だということをお前ら、認めているじゃないかと、それは我々の国策に沿わないようなやり方をしているので、記者クラブからちょっと出ていってくれとか、一時的に出てくれとか言われるんですよ。

けどもしロシアで、とんでもない北方領土で大変なことが起きちゃった場合は、それは、僕らはビザを取ってでも行きたいでしょう。ところが実はこういうふうになっちゃうんです。そういうのを僕はとても変なことだと思うんですが、さっき言った国策というものを突き放して見る視点が、実は僕らメディアにはとても必要なんですけど、たぶん北海道新聞の人も、本田さんのところもそういうふうに使われていると、そういう経験もあると思うし、つい最近も実はSTV、札幌テレビのクルーが北方領土にビザを取って入ったら外務省から嫌みを言われるわけですね。外務省の中で何かやっぱりどうも処分みたいなものをちらつかされたときに、その系列局である日本テレビがありますでしょう。親会社みたいなもので、親と言っただけとはいけないけど、系列ですよ。系列で僕ら、キー局だとそういうことをやったのをたぶん守るんじゃないかと思っていた



んですね。そうしたら、ああ、あれは勝手に STV がやったことですからと言って知らんぷりするんですね。自分のところにそういうペナルティーが及ぶのを恐れているみたいだね。それって僕ら、メディアの在り方としてすごい情けないことだなという。

北方領土を語るときに、そういうある種のものすごいバイアスがある中で何かを報じることはとてもやっぱり大変なことで、そういうある種の大きな意味での国策報道というような土壌が、もしかすると北方領土問題を報じるときにはできてしまっているのかもしれないなと思っていて、私はそういうものも含めて、今は相対化するというか、距離を置いてきちんと一個一個のことを具体的に検証していくチャンスだと私は思っているということを申し上げたいですね。

(岩下) でも、私は道内に住んでいますけど、北海道新聞とか毎日新聞って違いますよね。昔は何かちょっといろいろ根室は国境ではないとか言っていましたけど、最近そういうフレーズも聞かないですし、本田さんとかはどうですか。

(本田) 今、金平さんがおっしゃったことですがけれども、北方領土に最初に入ったのは北海道新聞でしたね。1988年の春、4月ごろだったと思うんですが、実はそれがきっかけになって翌年の1989年の9月だったと思うんですが、北方領土問題が解決するまでは入域を自粛してくださいという閣議了解があります。できました。ただ、その後も1991年にゴルバチョフが来日します。1993年の4月にまた先ほどのモスクワ争乱の直後にエリツィンさんが来たときは、マスコミ各社もどんどん入っちゃうんですね。生中継なんかも現地からやったりして、そのときは特におとがめはなかったんですね。ですからみんなで行けばおとがめがないということ。まあ、これは記者クラブから制裁を受けるというのは、この問題に限らず、何か横並びというか、守っていたのをちょっと1人抜け出すとまずいんじゃないかという、そういう記者クラブの在り方の話の方もあるのかなという気がします。

それともう1つ国策について言えば、先ほど金平さんが原子力の関係でおっしゃいましたけれども、今、事故があった後、各新聞ですね。原子力政策がどのようにして行われてきたのかという検証記事が各紙に載っています。載っているのを見ると、ああ、そうだったのかと私も読みながら思うんですが、実はその北方領土のところもそういうところが実は多々あるんじゃないかなと思います。

四島返還と言っていますけれども、もともと1956年の宣言の前に1955年の3月かな。5月から6月ごろからですかね。ロンドンでロンドン交渉というのがあるんですが、そのときに松本俊一さんという人が全権代表で行って、ロンドンで駐ロンドン大使のマリクという人とロンドン交渉



というのをやるんですけれども、そのときに訓令というか、政府で決めた最低限この方針でやりなさいというのがあって、それには最初、訓令 16 号とありますが、これには全千島と樺太全部を取り戻しなさいと。次に書いてあるのが全千島。それでもだめな場合は最低限、歯舞と色丹の 2 島、これを死守しなさいと訓令 16 号には書いてあるんです。

私は見たことはないんですが、そのことは産経新聞の元記者の方が『クレムリンへの使節』という本の中できっちり書いてありまして、私も見てみたいと思って、実は 2 カ月ぐらい前に、外務省に情報公開請求をしたんです、訓令 16 号を見せてほしいと。そうすると、不開示というのが出ました（笑）。つまり物はあるということなんですけれども、見せられないということで、もう 50 年以上前の訓令ですよ。それがまだ不開示となっていて、おそらく内容は『クレムリンへの使節』の本の中で書いてあるのと同じだと思いますが、じゃあ、どこから 4 島になるのかというのが、やはり冷戦とかいろいろあって、1955 年から 1956 年にかけて日本の方針がだんだん変わってくると。その以前は、先ほどおっしゃったように、1951 年には西村条約局長さんという方がちゃんと国会で、サンフランシスコ条約で放棄した千島というのに国後、択捉は入るのかというときに、いや、入りますときっちり答えていて、それはその後、そういう冷戦とかがあって日本の方針も変わってきたわけです。

ただ、一言、言っておきたいのは元島民の方々。この方々は戦後最初から 4 島を要求しています。もっとも返還運動の始まりというのは、今、言われているのは 1945 年の 12 月 1 日付け、終戦の年の 12 月 1 日付けで、当時の根室町長の安藤石典さん「石」に辞典の「典」と書いて石典（いしすけ）さん。その方と竹村孝太郎さん、この方は歯舞漁協の組合長さん。あと小泉秀吉さん、元島民の千島歯舞諸島居住者連盟という団体があってその理事長をやっていたら小泉敏夫さんのお父さん、この 3 人が道東に駐屯している GHQ に懇請書というものを持っていったのが始まりです。これには 4 島、もともと日本の領土なので返してほしいというのが入っています。

それが日本の政策というか、国策、いろいろな冷戦とかいうものの中でその 4 にうまく、ちょっと言い方は悪いんですが、利用させてきた面があるなど、これはきちっとまた検証しなければいけないんですけれども、それはそういう流れじゃないかなと思います。

(中村) 本間さん、今、本田さんがお話しになった 1955 年というのは 6 月にロンドンで日本とロシアのまさに交渉問題が始まってくるわけですね。それは返さないと向こうは言っていた。しかしそれがある時点で、7 月か 8 月ごろになって、一部返してもいいと軟化するわけですね。そこで最初に 2 島という話が出て、そうしたら本国の方は絶対にだめですよと言ったので、松本さんはそれじゃあ、だめだなという話になって、翌年の重光、ダレスというところへつながって



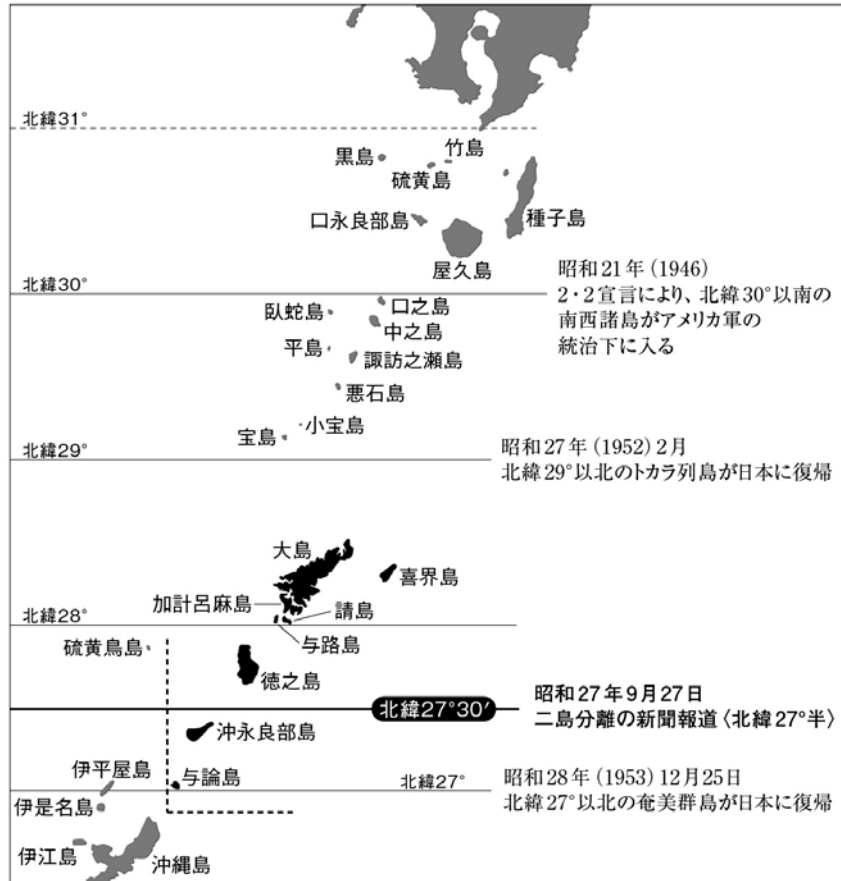
くるわけですね。1つのポイントはそこにあると思うんですが、その前に私は個人的な関心からいって、岩下先生がおっしゃるように、さらに金平さんもおっしゃった国策としての北方領土問題というものを日本はあの当時から、終始一貫して4島でいくんだということで、今もそのまま外務省は思っているのかどうか、この辺はいかがですか。

(本間) すごく難しい話を振っていただいて(笑)。当時、だいたいからして訓令16号によっていろいろなパターンがあって、その一番下を取りあえず満たした、そこで欲が出たという状況で、もっと返せという圧力と、それからアメリカの圧力という、この2つが重なった結果。当時の国策というのは、果たしてどこの水準に本当に置かれていたのかは、残念ながら我々はどうかがい知れない。でも最低限欲しいというのが国策なのか、最大限欲しいかという、その座標の問題だと思います。

(中村) 1956年になってダレス、重光の会談になってくるときに、じゃあ、そこまで言うならとダレスは沖縄は返さないぞという話をするわけですね。このあたりについて岩下先生、どう思われますか。アメリカの出方。

(岩下) そうですけど、今の本間さんの話を聞いていると、国策にもなってないんだよなという気がするんですね。その後も、国策のふりをしているだけで、本当に国策になってないままきているから、何か2+2でいくとか、4でいくとか、何か半分で割るのかどうか知りませんが、そういう感じになるんじゃないかと思うんですね。アメリカの話でいうと、それははっきり優先順位はもう沖縄は優先順位が上ですから、沖縄も周りから捨て石にされていますけど、千島に比べたら沖縄は重要だという判断をしているわけですね。

それとやっぱり北方領土というのは、残ってしまった4つという発想がありますけど、もともとは日本の周りの境界、国境をどうするかという話なんですよ。トカラ列島あたりでもアメリカがあって、その後は奄美も1953年まであって、小笠原もその後返して、1972年に沖縄という、日本の今の沖縄までの国境を当たり前のように思っているけど当たり前じゃなくて、本当に沖縄が日本に戻ってくるか分からなかったわけですね。結局そこが全部固まったから、じゃあ、残ったのはここだという話になっている、それで北方領土、ロシアという、そこだけ見てしまうのは間違いだろうと思います。



多様に引かれた疑似国境線

出典：鹿児島県和泊町『復帰運動の記録と体験記』2004年、裏表紙、を基に作成

それから日本の国境というのは、決まってないところがいっぱいあるんですね。北方領土だけじゃないんですよ。尖閣も竹島も我々は主張しますが、向こうは認めてない。向こうが認めてない限りは、これは誰がどう言おうが係争で、世界的には係争だと認められているわけですから。対馬のあたり、朝鮮半島と九州の、そこだけが大陸棚も含めて線がはっきりと決まっています。北東の方に行くと竹島がある、もっと行くと北方領土がある、稚内の辺もちょっと分からないところがある。南西に行くと尖閣があって、台湾と与那国の間は線がないんですね、お互いに何か伝統的な漁業とかって。全然、こっち側はほとんど決まってないという状況の中で、やっぱり北方領土のことも考えるべきだと私は思いますけどね。

(中村) ここまでのお話をお聞きになって、鈴木さん、どう思われますか。



(鈴木) いや、返還運動の最初の始まりからちょっと申し上げますと、これは外務省や政府がやった話ではなくして、元の島民が自ら声を出して始まったのが返還運動の始まりです。我々がなぜ「四島一括」と申し上げているかということ、4島の住民で組織された千島連盟は1人たりとも、ここから逸脱するものではないという考えが根底にあります。常にやっぱり街頭においても、集会においても、声を上げる段階においては、国内世論の一枚岩に根ざした運動をするために外務省とは、我々が四島一括早期返還についての唱え方について、外務省や内閣府が返還に対する交渉にいささかの疑問や、影響がございますかということを探ねながら、我々は確信を持った運動をしています。

それとともに外務省は、かえって国内世論の声の大きい方の、はっきりした方がいいと。その四島一括早期返還については、そのまま続行してくださいというのが外務省の考え方です。今もこの問題は変わってないと思います。

それからもう1つ申し上げますけれども、ロシア側もその都度、少しのぶれはあるんじゃないのかなということを申し上げたいんですが、昨年1月に私も人道支援の団長として国後島を訪問しております。その際、医薬品や医療消耗品の一部を携えて、古釜布湾にまいりましたけれども、その際にロシア側からここはロシアの領土だと。従って手続きのやり方が少し変わったと、これは本国の指示だと。ということは、もうすでに本船が我々が古釜布に入っていることは、彼が主張するロシアの領土の中に足を踏み入れているわけですから、それをあらためた言い方をするのは、何ら問題はないはずなのにおかしいと。

この事業も言ってみれば、ビザなし交流の枠内にある事業として、政府やロシア側も認識しているはずですが。なぜそういうふうになったかということ、出入国カードにサインをなさないと。このサインをしないで上陸することはまかりならんと。そのときに僕とやりとりしたことは、このままもし、荷物を渡さんがために私が島に上陸した場合に、君らはどんな扱いを我々にするのかと、こう申し上げましたら、鈴木さんがもし我々の了解なしに上陸したとすれば、5年間はロシアの国はビザを発給しないだろうと。我々は自分で好き勝手に上がるんじゃなくして、ビザなし交流の枠内でそれをもって住民支援のためにその荷物を渡すにすぎないのであって、国後に今、このまま全部置いていくわけにいかんと。

従って私は団長の責任で、この荷物を全部、根室に持ってかえるとはっきり申し上げて、16日、17日、18日と3日間の間、彼らとやりとりしましたが、結果的に答えを出せずに帰ってまいりました。こういうふうにして、わずかなことに国境のめりはりをつけようとするロシア側の態度にも、何か問題はあるんじゃないのかなと、そんな方に今でも考えてございます。



(中村) 岩下先生、今、鈴木さんがお話をされたことについていかがですか。

(岩下) ロシアの対応の違いですか。まあ、どうでしょうね。なるべく彼らは自分たちのものであることをじりじりと認めさせようと思いたいと思うんですよ。だから私はちょっと言葉を返すようですけど、やっぱりビザなしというのはパスポートなしの枠組みで普通にちょっとビザ免除で行くのと違う枠組みですよ。だから要するにパスポートを持っていかないから日本のものなんだということを、まあ、密室で入るときはいろいろとやっているんですけども、それはそれで一応、フィクションでも作っているわけですよ。ところがサハリンに行ってビザを取って入るということは結果的に向こうのものだと認めることになるわけで、どうして外務省が嫌がるかという、それはあくまでももし国際司法裁判所とか、裁判になると、そういうやつがいっぱい入っていると。それだけならいいんですが、それを国が制止しないと、国がやめろと言わないともうすぐ裁判に不利益になるというところがあって、別に肩を持つわけじゃないですけど、彼らの中でもそれを言わないとよくないというところではあるんじゃないかなと思うんですね。国策というよりも。

もう1つ言うと、石垣副市長なんかはビザを取って行くやつは許せんみたいなことですよ。ぜひ言ってくださいよ。

(石垣) バイアスの話ですけども、私、何年前かな。前のロシア課長が来たときに、今、うちでは経済交流だよと。経済交流をやらないで地域はもう沈んでしまうよと。いろいろな話があるけど、やっぱり経済交流をしっかり進めるべきだと。ビザなしも実はビザを取っているのと同じなんですよ。どう読み替えるかということなんです。そのときに、経済交流の話をしたときに、その課長は同じことを言いました。経済交流になって税金が発生するよね、それからトラブルになったときに司法が発生するよねと。そのときに向こうにすべて委ねてしまったら、あまり人には言ってほしくないんだけど、国際的に裁判所に訴えられるのかと。

国際裁判所には、うちだって訴えても、向こうが受け取らないと、係争の相手がいない、受け取らないと裁判にならないわけですから。でも裁判所に訴えられたときに、そのことで負けるよねと。だから経済交流というのは、やっぱり相当慎重にしなければいけないよねと。それから今のビザなしの話もそうですし、ですから、私はそこはやっぱり知恵を出して読み替えればいいと思います。ただ、今のビザを取って北方四島に入るということは、もう直感的に私どものところから入ってほしいというのが本音なので、何でサハリンから入ってしまうんだということの思いの



方が強いですね。

私はやっぱり根室は北方四島への交流の拠点であるし、ずっと母都市であったわけですから、もし外務省がそれは遺憾だということであれば、もっと視点を変えて根室から行けるような方策をしっかりと考えるべきだと思います。

そういう意味ではさっき経済交流の話をしましたけれども、現実的には例えば、北方四島から根室にユニとかが40億円ぐらい入っていますけれども、これは財務省では、当分の間外国と認めるということで、そういう対応になっておりますし、また入管も当分の間、外国と認めるということで、財務省と入管の方はそうなっているんですね。外務省だけになると精神論で言っているような気がしてなりません。そういう意味では、やはり根室は交流の拠点ですので、もっと視点を変えて北方四島に行くときは、ビザをビザでない知恵を出しながら、きちっと行けるようにしてほしいと思っています。

(中村) 大平正芳さんが外務大臣のときに、あれは1972年だと思いますが、国際司法裁判所に北方領土問題、これを付託したんですね。ところがソビエトはグルムイコ外相がだめということで、これは紛争国、両方が同意をしなければ司法裁判所は受けないということになりますから、こういうことになりますね。

今回の主たるテーマを私はそういうふうに理解しているんですが、やっぱりローカル、地域としてのイニシアチブをどうするか。まさに主導性といいますか、発言権をどういうふうに持っていけるかということが、今、この北方領土問題に対しては非常に大きいだろうと思っています。本田さん、そういうことに関していかがでしょうか。

(本田) 今、石垣さんがおっしゃったことにちょっと関連して補足したいんですけど、ビザなしというのは先ほど岩下さんもほとんど普通のビザと同じだという話だったんですが、一番大きな違いは、日本側が行くときに普通はビザを取ってパスポートを持っていくんですけども、パスポートの代わりに外務大臣が発行する身分証明書と挿入紙を持っていくんです。「挿入紙」ですが、つまりこれは日本政府が発行している、ビザは相手政府が発行していると。だから日本政府が発行しているから、それは向こうの管轄権を認めたことにならないんだということで、そこがポイントといえば一番のポイントです。

今、根室で経済交流をやりたいということなんですけど、あくまでもこれはビザなしの枠組みの中ですよ。その中でやりたいということですけども、先ほどちょっとお話があったように、私が理解するに、母都市という言葉、母なる都市という言葉が石垣さんは使われたんですけど



も、先ほど言いましたけど、根室というのはずっとレポ船、特攻船で今はロシアの密漁船という感じで、ずっと裏経済がかなり支えてきた面があります。根室が今、それを経済交流と口に出して言い始めたのは、その裏経済に依存するんじゃなくて、それをちょっと表に出して、正々堂々とやりたいということだと思うんですね。これが2006年でしたよね。2006年の根室市がまとめた提言の中にあります。

つまり何でその提言が出てきたかというのは、1つにはもうビザなしが今年で20年になって、非常にマンネリ化しちゃっていて、返還運動のために、そういう環境づくりのためにやるんだという目的でやっているんですけど、なかなか本体の交渉が進んでないということで、皆さんに非常に不満があるということと、もう1つはやはり根室の経済的な現状ですよ。経済的な疲弊が非常に進んできたということがあると思います。

ただ、やっぱりそこで問題になるのが白でもない黒でもない、灰色だということなんですけど、石垣さんがさっきおっしゃった北方四島というのは、関税法で条文がありまして、この「4島は当分の間、外国と見なす」ということになっているんですね。だから向こうから入ってくる荷物、ウニとかカニとかも、実は古釜布の税関のはんこが押してあるのが入ってくるわけです。検疫法にも関税法と同じような、みなし条項があるんです。ところが、出入国管理及び難民認定法には関税法のような特別の規定はないんですよ。

ですから例えばどういうことが起きるかと言うと、サハリンに住んでいる人がゴムボートか何かでひょこっと来て、あったんですけども、納沙布岬の売店でビールを買って帰ろうとして捕まえたんですけども、この人がもし4島に住んでいる人だったら、法律に違反するかどうか微妙です。実際に2001年5月には根室市で、上陸許可証を持たずに不法上陸した船員4人、このうち3人が国後島在住ですが、出入国管理及び難民認定法違反の疑いで逮捕された後、処分保留のまま釈放されています。同じ国内だから、国内を移動しているのと同じなので、そういうおかしなところがあって、そういう灰色のところも今の経済交流にもかなり影響を及ぼしているというところがあると思います。ちょっと話がまとまらなくてすみません。

(中村) 石垣さん、今年の2月11日に日本とロシアの外相会談がモスクワであって、こちらは前原さん、向こうはラブロフさん。このときに北方四島における共同経済活動について、日本の法的立場を害さない前提で何が出来るかを日本とロシア双方のハイレベルで議論していくことになったということですね。そしてその後、7月27日は日本とロシアの次官級協議が、これもモスクワであって、四島共同経済活動についても議論が行われ、引き続き日ロ間で検討していくこととなったと。これが今、根室を中心にしていろいろお取り組みになっていることだろうと思って



います。

それで、今年の9月に北海道経済同友会の例会で、高橋はるみ北海道知事が北方領土のことでコメントをしているんですね。「今、地元と私どもでひそかに、まだ公表する段階にはないわけですが検討していることがあります」と。これはご本人の講演内容で抜粋です。「それは何かと言えば共同経済事業ということでありませう」と。

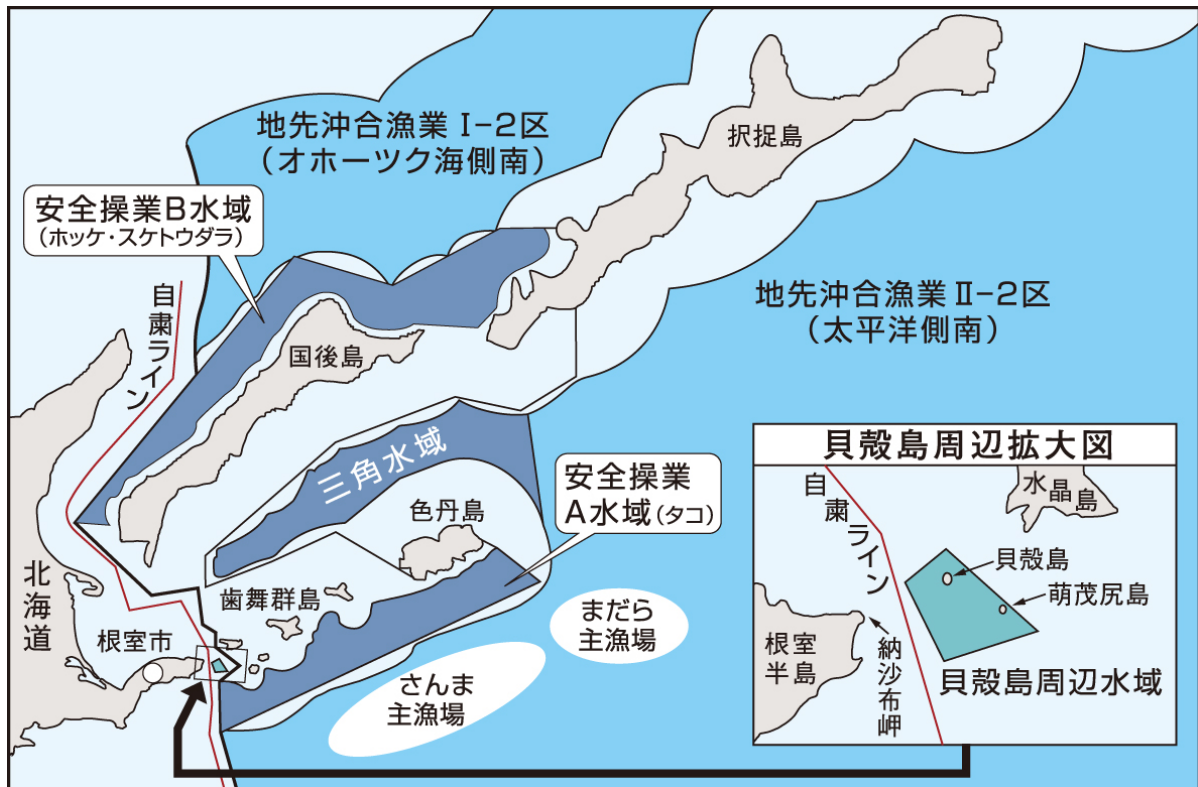
若干読ませていただきます。こういうふうには知事は言っています。「北方四島の地域に、かつて日本人の島民の方が1万7,000人ぐらいおられたわけですが、今はロシア人の方々が入っています。ですからロシアの本土から島に最初に入られた方々ももう70歳になっているはずで、もうその方々のご子息、次の第2ジェネレーション、第3ジェネレーションまできている、そういう状況にあるわけですね。この北方四島においては経済行為というものは、それは主権を害するというで今はまったくなされていません。唯一実施されています北方領土との関係はビザなし交流というものです。これは主権に影響を与えない形でということで、両国政府がいろいろと知恵を出して、今の枠組みということをやっているわけではありますけれど、それに加えて経済交流ができないかなということを考えています」と、こういうお話をされています。いかがでしょうか。

(石垣) 私どもが考えているのは今、ビザなしがこれだけ長く続いて、それでポストビザなしを考慮しているんですね。ポストビザなしというのは、今までの歴史の積み重ねでビザなしに学ぶことがあるだろうと。ビザなしに学ぶことで、新しいビザなしの形態で何かできないか、と考えたわけでありませう。もう1つ日ロの安全操業というのがあります。これは羅臼の船が20隻、20隻で40隻、根室のタコの空釣りが8隻、これは当初、私、ちょうど大矢市長の秘書係長をやっていたときに、ポキージンという方から提案があつて、ファクスが1枚入りました、当時はテレックスですかね。それで安全操業の枠組みができないかということで、当初は外務省に言ったら、とてもじゃない、そんなことはできない、向こうのあれを認めることになるって、相当、6～7年投げられたんですかね。今、現実に安全操業が行われています。

羅臼の船も、確かに金銭的にはよくないんですけど、ただ羅臼の目の前から20隻の船が外に出られるということは、羅臼側の漁場も1隻当たり広がることになるので、大変有意義なことですね。ですから、ポストビザなし、ビザなしに学び、安全操業に学び、それから昭和39年ですか。貝殻島コンブもこれは民間協定で行われております。ですから貝殻島コンブに学び、そういった今まで日ロ間で培ってきた安全操業、ビザなし、そして貝殻島昆布のこれだけの学習を次の経済交流というんですかね。新しいビザなしに展開できないかというのが私どもの考えで、それは北海道の方にもお願いをしております。



これがそうですね。安全操業はB水域がタコで、A水域、ホッケ、スケトウダラ、これは20隻ずつ時期を変えて羅臼から船が出ております。ですから、これの枠組み、これの考えを次に展開したいというのが私どもであります。



(中村) 本間さん、地元にはいろいろな交流の仕方があると思いますが、そこについてご発言を。

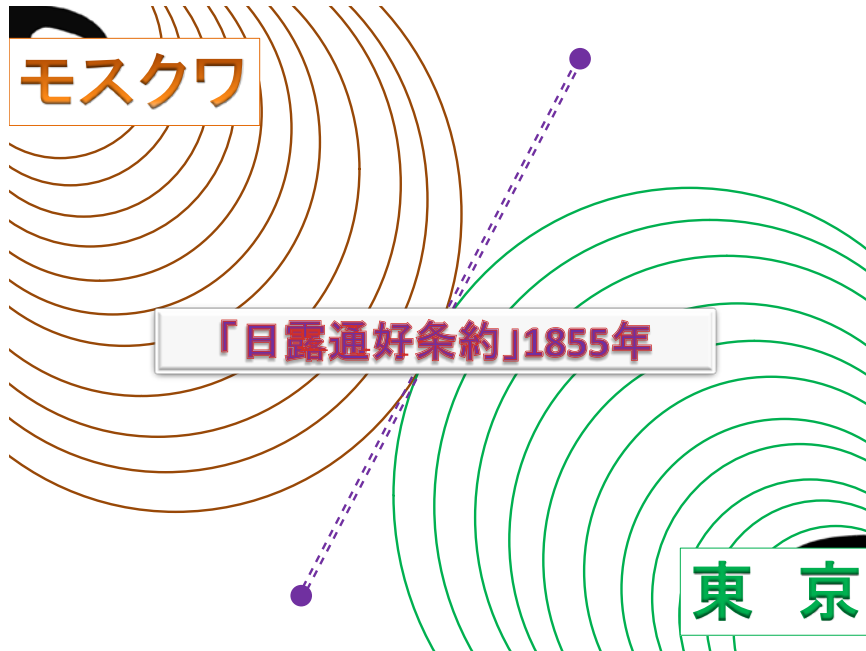


【本間】 今から考えると、これ（ビザなし交流）は画期的な話だなと思いました。僕は足かけ23年前から根室にいますが、その当時、ソ連人は誰も市内を歩いていませんでした。つまり国境でありながら、人の交流がないという、実に不思議な国境でありました。その国境を隔てていたのがこの根室海峡の「中間ライン」なんですけど、僕らは「見えない壁」と言っていました。この「見えない壁」を通して、当時出入りできたのは2つの形態だけだったんです。それはレボ船と特攻船。日本人がある意味で機密とか情報、金品を向こう側に渡す見返りとして、漁獲を認められるというアンダーグラウンドな操業です。

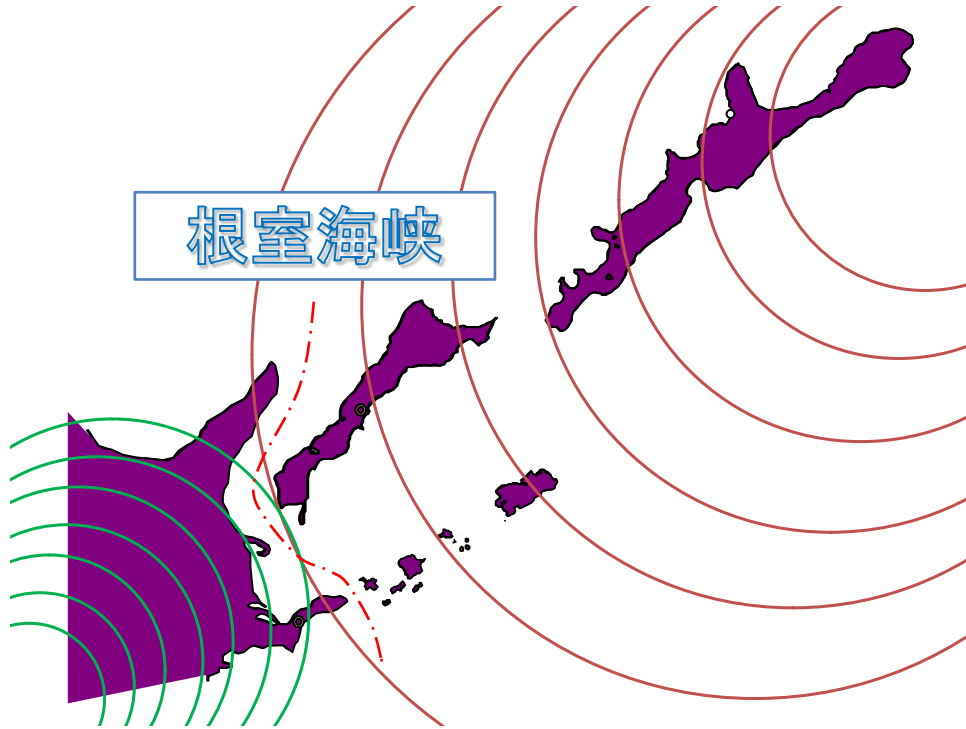
「見えない壁」というのは、あるときには穴が開き、あるときには底が漏れ、あるときにはまた低くなったり、高くなったりしているわけです。先ほど鈴木さんが国境にめりはりをなぜ付けようとしているのかと言われてました。これはやはりそのときの国際情勢とか、政権基盤とか、あるいはナショナリズムとか、そういうものによって壁に変化が生じているということの意味します。「見えない壁」というのは、ベルリンの壁とか、38度線みたいな硬い壁ではなくてソフトな壁なんです。そして可変的な壁です。この可変的な壁を何とか変えたいという願いがおそらくこの自粛ラインから、沿岸の3マイルまで操業できる安全操業というシステムをつくったわけです。

あのととき羅臼漁協で、日の出のちょっと前に船が出て行ったんです。東の空から、国後島の向こうから日が出てきて、そしてそのときに日本の漁船は日の丸を掲げて国後島の水域に行った。そのとき私は双眼鏡を持って1隻1隻、通り過ぎて行くのを見ていました。そうしたら、ある漁船員が太陽に向かって祈っているんですね。これは豊漁を祈っていたのか、あるいはこれまで行けなかったところに行けたという祈りだったのか、それは分かりません。でもやはりこの壁を越えたいという、見えない壁を越えたいという願いが実現したことをかみしめているように僕には見えた。だからこういう取り組みをこれまでのビザなしの次の段階にやりたいという気持ちは非常によく分かります。問題は、じゃあ、どういうふうにやればいいのかというところなんですよね。

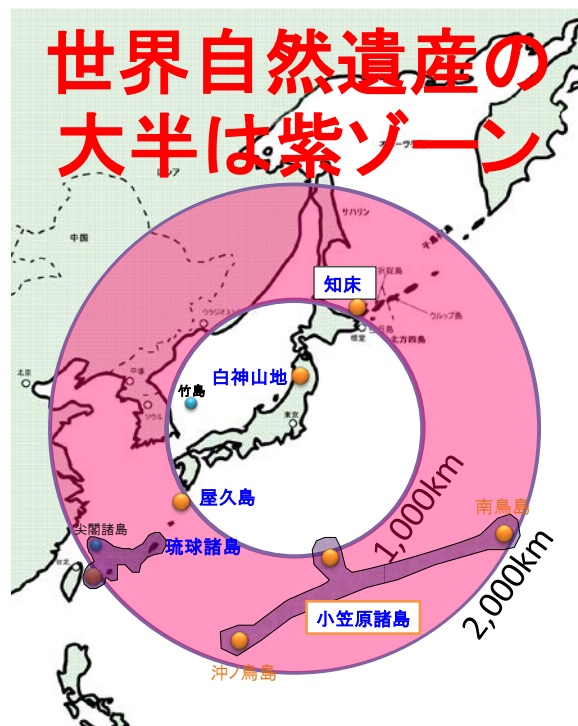
私の PowerPoint 出していただけませんか。皆さん、ちょっとこういうことを想像してください。国境って、あるいはボーダーってどんなものだろうと思いますか。国境というのは大きな池の両端から同時に石を投げた、その波紋、着水したときからの波紋が接するところ、それが国境、あるいはボーダーだと考えると非常に分かりやすいと思います。こういうことです。日口間に初めて国境が引かれたのは1855年、つまりこういう形で択捉島の向こう側に引かれたわけです。

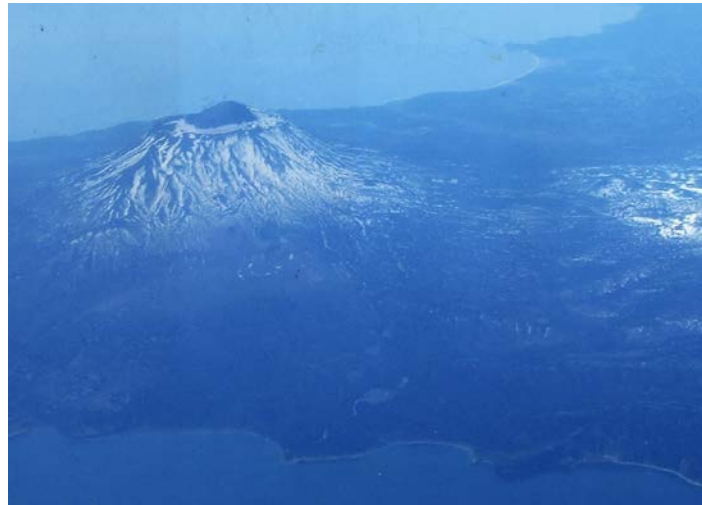


国境は力関係によって変わります。あるときは日本側が有利なときもあるし、残念ながら今、
こういう状況でここにラインがあります。これが「見えない壁」です。



ボーダーというのは、非常に面白い特色を持っていて、これは世界自然遺産の部分なんですけど、知床にしても、小笠原諸島にしても、屋久島にしても、みんな1,000キロから2,000キロのドーナツの中にあります。つまり東京にコンパスのしんを置いて同心円を描くと1,000キロから2,000キロのところにはかまともな生態系が残ってないということを意味します。もちろん北方四島というのは、その1,000キロから2,000キロのこのドーナツの中に入っています。





緑がほとんどです、爺爺岳です。

(ロシア人提供)

これは対馬です、やはり緑の島です。与那国、これは空港ですが、そこの向こう側は山です。



例えば韓国と北朝鮮の間のDMZも、これも非常に良い生態系が残っています。



(NPO 法人タンチョウ保護研究グループ提供)



そこへメドヴェージェフはやって来たわけですね。静かな環境でと言いながら、だまし討ちに遭いましたと。



島は奪われたと、こっちは岩ですけどね。



ある意味で大統領選があったり、寝たふりをしている状況の中で何か動かなければいけない。





ちょっと違う視点で考えてみたらどうなのかと。このラッコのクーちゃんなんですけど、これ、ツブが非常に好きなラッコで、ホタテは食べませんでした。ホタテは殻を割るための道具だったんです。こうやって割っていたんです。



あるときに、たぶんホタテの殻の方が割れてしまったんでしょうね。それで食べてみた。





この目の輝き、実に美味しい、という目をしていますね。つまりホタテも美味しいということに気が付いた。つまり今までと違う視点で見たら、ひょっとしたら世界は広がるかもしれないということです。これまで「見えない壁」に遮られていて、何もできなかったところに何か新しいものを創ったらいいんじゃないかと。



知恵の絞りどころというところですね。思い出してください、知床というのは世界自然遺産ですけど、この世界自然遺産を調査した国際自然保護連合が、日本政府に対してアドバイスをしたわけです。知床と近隣諸国との間には非常に同じような生態系があるので、将来的には世界遺産平和公園にしたらどうかというようなものです。

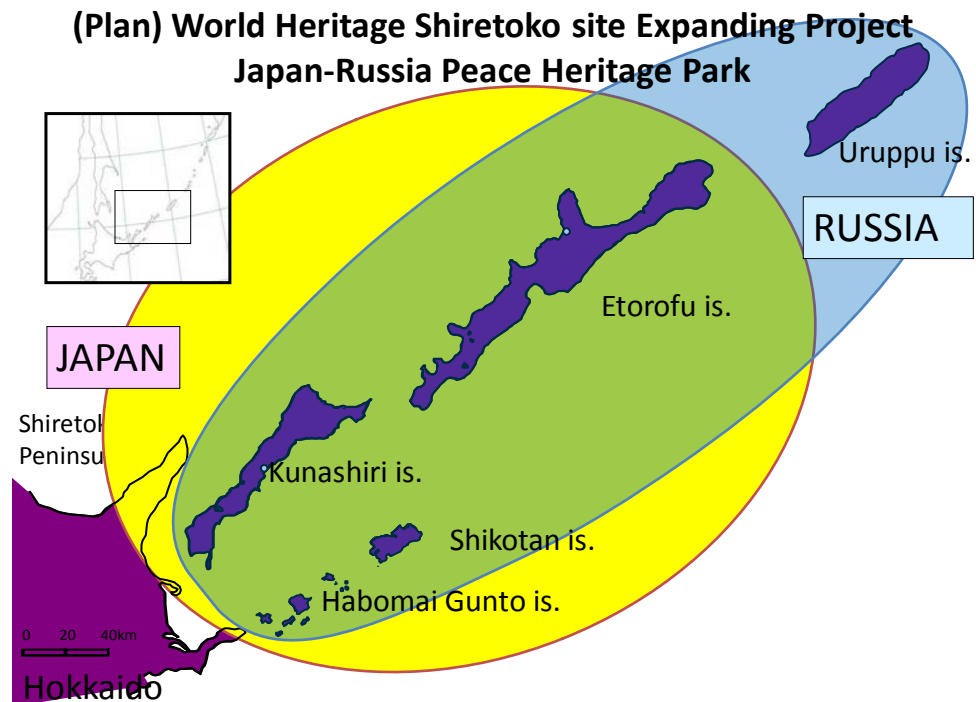
いまが**知恵**の**絞り**どころ**かも**
WORLD HERITAGE NOMINATION - IUCN TECHNICAL EVALUATION
SHIRETOKO (JAPAN) ID No: 1193
5.3 Kuril Islands
There are clear and apparent similarities between the environment and ecology in Shiretoko and the neighbouring Kuril Islands of Russia. It is noted that there has been informal contact between researchers from Japan and Russia in relation to the ecology of these areas. Should it be possible for the States Parties to agree to promote the conservation of these properties in the future, there may be potential for development of these properties as a transboundary "World Heritage Peace Park".



今、赤で囲っていた「ロシアの」という言葉がありました。当時の小池百合子は北方担当大臣でありながら環境大臣だったものだから、領土問題を非常によく分かっておりまして、この「of Russia」という2文字を削ってもらったわけです。

ということは、将来的にはこういうことができるかもしれない。そのまだ前段階だと思うんですが、こういうことを考えてみました。

日本側は知床から北方四島、これはわが国が主張している部分です。



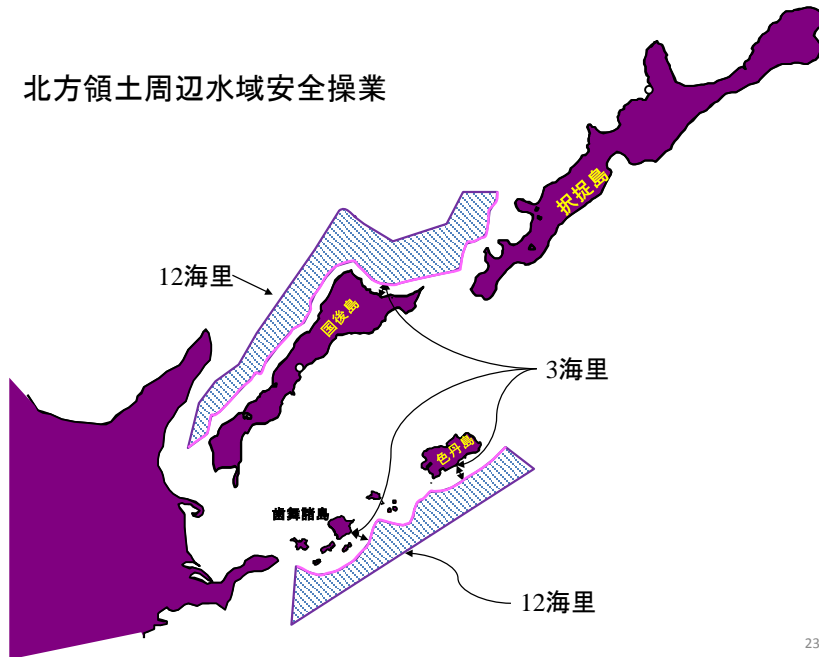
ロシア側としてはメンツがありますから、ウルップ島からこの4島にかけてを自分のものだよという形にすれば双方のメンツが立つと。





つまり「グリーンベルト」という概念で考えてみたらどうなのかなど。ここの4島をある意味で、せっかく残ったんだから上手に活用するという、そういう手段があるんじゃないかと思えます。それでさっきの安全操業になります。

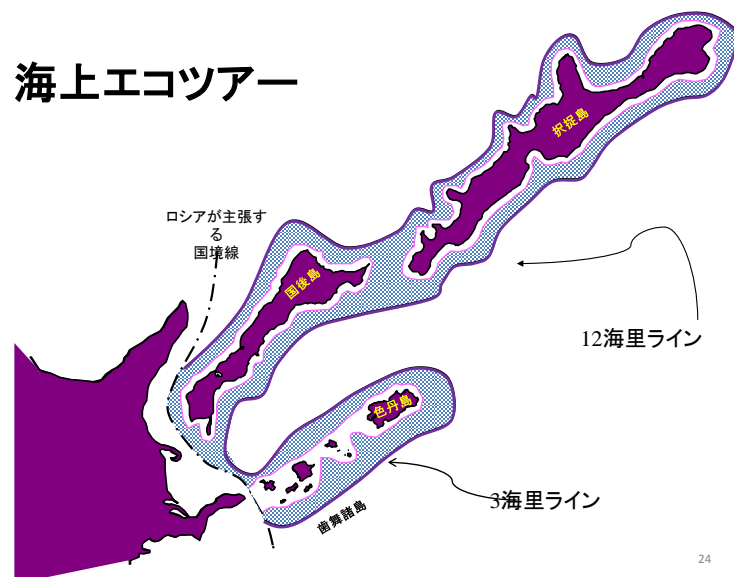
北方領土周辺水域安全操業



23

例えば、こういうところは今、漁業しかできませんけど、同じようにクジラがいたりします。シャチがいたり、マッコウクジラがいたり、こういうところで例えばエコツアーをやることのできないか。そうすると今までは納沙布岬の先端で、ああ、ずいぶん近いんだなと言っていたのが、もっともっと近くなる。そして目の前にその島があって、元島民が帰りたいという気持ちが分かるんじゃないかなど。

海上エコツアー



24



世界遺産ではないが 国境紛争終結条項 に PEACE PARK 設定の先例はある

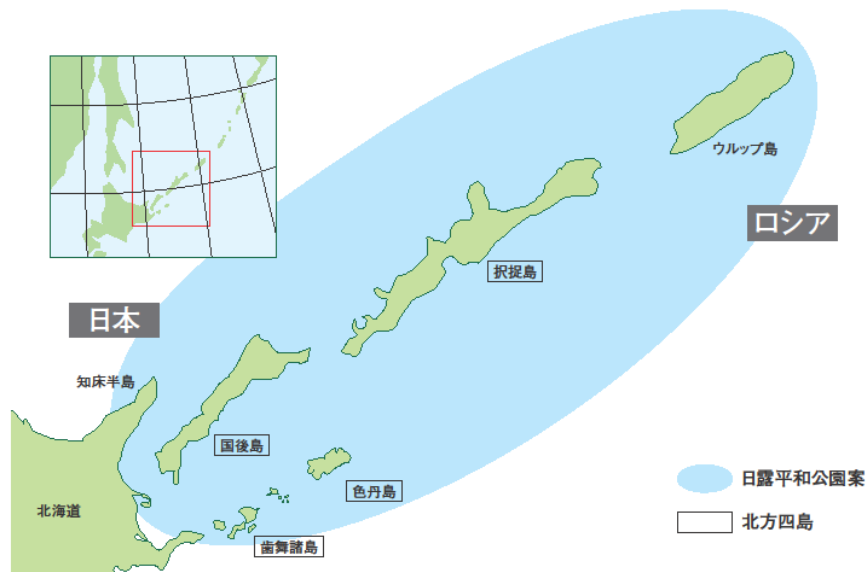
ペルー・エクアドル国境

ITTO提供

つまり海上エコツアーみたいなものを例えば始めたらどうかななんて考えています。

実際に世界遺産ではないんですけど、ペルーとエクアドルとの国境の問題を解決するに当たってここを平和公園にしました。こういう形でウルップ島まで拡張してしまえば水産資源がひよっとしたら持続可能な形で残され、そして根室にも、今、4島に住んでいる人たちにも、双方が持続可能な社会を築けるかもしれない。それには知床の拡張というのは、1つのアイデアじゃないかなと思います。

日露平和公園案



何とかこういう形で野生動物だけじゃなくて、ロシア人も日本人も、そして元島民も、みんなが満足するような、何かそんなことができないかなと思いました。ありがとうございました。



(岩下) 素晴らしいアイデアだと思います。本間さんと最初に出会ったころは、私が島を分け合ったらと言ったら、いや4つだと言っていた時代がありました。島を共有してという今の話は素晴らしいと思います。ただ最初の方におっしゃった水紋ですが、力関係で変わるなら、知床だって取られるんじゃないですか、こういうことをやったら。

(本間) 係争地ではないですからね。

(中村) ところで岩下先生、2000年から2008年までプーチンが大統領でずっときたわけです。そしてその後、メドヴェージェフ、そしてまたプーチンという、既成事実になっているようですが、次のプーチン体制になって北方領土問題は動くのか、動かないのか、終わっちゃうのか、まだまだ先があるのか、どうですか。

(岩下) 何か今日、中村さんとはよく番組で一緒になってあうんの呼吸でやっているんですが、5~6人一緒にやるのは初めてなので、どのタイミングで何を言っているのか苦しんでいたんですけども、さっき支度部屋でやり合った話になったので、これだとわりと次にどう展開するか分かるので読みやすいんですが、さっき金平さんと話したときに「変わる」と金平さんはおっしゃったと僕は思うんですね。僕は変わらないと思っているんですね。

つまり日本側が4つと言っている以上は解決しないというのが私の持論ですから、それはプーチンになったからって期待を持たない方がいいし、期待を持たせられ続けてここまで引っ張られ過ぎた。僕はもうこれ以上、鈴木さんあたりとまた裏切られましたね、とかテレビ番組でやりとりするのは嫌ですから。変わりませんといたい。金平さんにどこが変わるのか伺いたいです。

(金平) いや、変わるというのは交渉相手の、つまり御しやすさとか、話をする相手としてプーチンというのはよくも悪くも、非常に独裁的な政治手腕で、要するに今のメドヴェージェフという人も傀儡なわけですよ。はっきり言ってしまうと。つまりプーチンには誰も逆らえないみたいなね。たぶんロシアとソ連というのは、本質的に僕はあまり変わってないんじゃないかと思っていて、共産党なき社会主義みたいなね。あの強い手とか、そういうものがないとあの国はまとまっていかないんじゃないかみたいな、地政学的にも、歴史的にも。

そのときに、たぶん今度法律を変えて、あとつまり10年ぐらいプーチンがナンバーワンとしてあそこの国に君臨するということになると、たぶんソ連、ロシアの歴史の中でもたぶん2番目ぐ



らいに、一番長いこと権力を握った人間ということになるわけでしょう。変化のスピードも当時とは比べものにならないぐらいに、今、実は最初のころ北方領土の二島返還とか言っていたころ、ロシアがまだ経済的にも安定してないころに比べると、今、ロシアというのは、ものすごいスピードで経済発展を遂げているわけで、そういう国の中にああいう強い手を持った人間が交渉相手として出てくると、決まるときはものすごいスピードがつくというか、要するにトップダウンがやりやすくなるという意味で、変わる可能性が今よりは強くなったんじゃないかと。

(岩下) 日本が4つと言っている間は変わらないんじゃないですか。日本が変わることが前提じゃないでしょうか。

(金平) 僕はさっきから、だいぶすれ違いがあるのが、僕が言っているのはつまり四島一括と言っているところが国策だという、つまり本当のことを言うとぶれまくっていたわけで、日本だって。もちろん島民の方は最初からずっと4島と言っておられたというのは分かりました。でも実は外務省の中だってものすごく割れていて、さっきのダレスに恫喝をされて震え上がって、当時の重光というのは本当にとんでもない、まったくひどいことだと、英文は「terrible」になっていましたけど、こんなことをダレスに言われたみたいな、それは当時、お前、2島でソ連側と妥協したら、沖縄はもう二度と返さないからなと脅されたら、当時の日本のどんな政治家であったって、それはもう震え上がっちゃってのまざるを得なくなるわけでしょう。

そのアメリカに対しての日本の外交施策の形作られ方というのは、今に至るまで、今の野田政権に至るまで、基本的に僕は変わってないと思っているので、そっちの方が実は問題なので、4島というのはそういう意味の国策と言ったんですね。実は僕がいたときに、当時、佐藤優という人がモスクワにいたときに、三等書記官からだんだん上がって行って力を付け始めていたときで、彼らなんかが一生涯懸命動いて、まあ、2島だよなど。日ソ共同宣言の1956年まで戻って、2島をまず返してもらおうと。要するに先行返還論みたいな形でね。そういうことを言っていたのが、非常に現実味を帯びていたんですよ、あのときは。

それがひっくり返った、あれもやっぱりアメリカだったですよ。アメリカがやっぱり安全保障上、あそこの2島というのを戻すところでやられてしまうと、つまり自分たちの安全保障論の一角が、オホーツク海の安全保障というのが崩れてしまうから、どうしてもあそこはのまないみたいな話になって、結局それもだめになってみたいに、常に日本のぶれ方はアメリカにしかられて、また下を向いてぽつんとなって、また戻って4島と、これは政治的なレベルで言っているんですけど、そういう動きがずっと続いてきたのを見ているものですからね。



今、お聞きしていて、地元の方、元島民の方は4島で一括しているというのが分かって、それはそれで僕はとても貴重なことだと思いますが、ただ歴史を顧みると、例えば僕がつい最近読んだ本で、道下匡子さんという人が書いた、これは樺太からの引き揚げのときの模様を書いた、これはとても優れたノンフィクションで、僕はこういう本があるのを知らなかったんですけども、実は読んでみるとものすごい混乱が起きていて、当時、真岡に住んでいた樺太の人たちも、実は軍にも見捨てられ、それから行政にも見捨てられ、とんでもないことになっていたというようなことが書いてあって、そういう人たちはどういう意識を抱いたかという、サンフランシスコ平和条約と、それからポツダム宣言を受け入れていたという時点でああいうふうになってしまう、ソ連に対して明け渡さざるを得なくなるという状況認識は、軍だって持っていたはずじゃないかと。

それを旧島民ですよ。それを見捨てて逃げてしまったことに対して、ずっとやっぱり不信感を抱くような、そういう元警察官の父親が残した手記のことを後付けした、とても優れたノンフィクションだと思うんですけど、こういうものを読むと元島民の方だって、おそらく根室とか、それから向こうで育った方以外に旧南樺太にいた人たち、それからもっと言うと旧満州にいた人たちなんかを持っている日本政府のあのときの、あるいは軍に対して持っていた感情は、必ずしも一枚岩じゃなくて、いろいろな状況によって変わるということが分かったので、そう単純に僕は、元いた人たちも含めて四島一括は当たり前というふうには、なかなか言いづらいなと思います。

それからもっとたちの悪いことに、樺太に関して言うと、そこに元日本人に無理やりさせられた、要するに韓国朝鮮人が残留したままずっと樺太に残されてしまって、その戦後処理について、日本政府はまったくずっと手を付けなかったみたいなことがあったでしょう。そういうことをやっている限り、つまり自分たちの国さえよければいいという解決の仕方は、やっぱりどうしたって無理がある、どこかで破綻が生じてくるという思いをずっと僕は持っているものですから、かなり僕は、実は自分では引きながら北方領土問題というのは見ているつもりなんです。

今、本間さんのはとても面白かったです。面白かったというのは、さっき共同経済事業のことを石垣さんがおっしゃったでしょう。そういう主張と、それから今の例えば北方エコ環境公園みたいな構想というものと、領土要求というものが、僕は本当に申し訳ないんですけど、何か動機がずれている気がする。僕自身も例えばソ連に、僕はロシアに暮らしていたから、日本人というのはどっちかという嫌口ですよ。なぜか知らないけど、露助なんていう言葉が残っているぐらいでルースキイを。つまり、ところが暮らしてみると、ロシア人だってとても温かいし、親日的だったし、僕がいたころはですよ。とてもお互いに尊敬し合えるような、仲良くなれるよう



な、やっぱり隣人なわけですよ。

ということは、本当は仲良くしたいわけでしょう。その方が地元にとってもいいという。いろいろな構想で共同事業とか、それから今の平和公園なんていうのは素晴らしい考え方だと思いますけど、それと領土をよこせという、返還というのとは何か連動の仕方がとても、つまり、何て言ったらいいんだろうな。どっちがどっちに従属するという関係でもない。僕はどっちかという、両方とも平和に暮らして、両方が mutual、共同に beneficial、双方の利益になる方がいいに決まっているんですから。ところがそれを阻むものというのが、どこか外的な、例えばアジアにおける安全保障論とか、それは実は関係でいうと、アメリカとの関係が日本の場合はすごく深いから、そういうところの力関係が働いて、まなじりを決したような形の、政治的要求としてのソビエトの不当支配か。

この間、菅直人が突然言い出したような、ああいう無神経な言葉をいきなり言うてみるみたいな、ああいうことでまったく地道につくり上げてきたものが一気にだめになってしまうような歴史を見てきてしまうと、今の政治的な一見での領土返還要求というものと、お互いにうまくやっていきたいという住民同士の願いというんですかね。そういうものの中に何か乖離があるような気が、僕はしてしまうんですね。

(岩下) だからここで議論しているのは、本田さんが最初に言ったように領土要求と言ってしまおうとそうなんですけど、線を引けと。線が引かれてないことの苦しみということが大事だという話で、そう考えると両立すると思います。それと最初の話で私は話がかみ合ったなと思うんですが、この地図（4頁の地図）をずっと見せているのは、北方四島だけを見せるんじゃなくて日ロ国境あるいは満州まで含めて全体を考えた中で位置付けなきゃいけない、北千島も含めてという話なんです。その延長に、4つは1つじゃないということですね。さっきも歯舞もいっぱいあると。

だから鈴木さんは、我々は四島一括で元島民一致していると言うけれども、それは鈴木さんのここでの個人的見解だと私は思いますし、最近のメディアでは、いや、もうそんなことはない、歯舞からだけでもとか、そういう議論も実は中では起こってきていますのでもっと進んでいると思います。

(本間) そうなんです。つまりずれているんです。なぜずれさせたかということは実は私は意図的にずらしたんですが、これだけもう領土交渉にすらなっていない状況の中で何ができるかということ考えたときに、領土交渉を本格的にやる前に、つまりやれない状況であるのであれば、



ほかの窓口からちょっと穴を開けたらいいんじゃないのかなと思うんですよね。

つまりまずはあと1年、大統領選まで動けないですよね。それからまたしばらくきっと動けないですよね。本格的に始まるとしてもその次の一手を打つ、その打つ前のつなぎ的なものとするれば、せつかくビザなしも20年たって次のステップに行きたい。根室市はビザなし経済交流をやりたい。特区をつくりたい。そういうふうにはいるけど、やっぱりディスクリーマー条項があります。つまり日本の主権を害する可能性がある。では、害さない形、何かないかな、と考えたわけです。

ユネスコの世界遺産条約第11条3は、係争地の扱いについて、双方の国がオーケーを出せばいいというふうに規定しているんですよ。つまり係争地であっても双方が納得するシステムをまず作ってしまう。そこで持続可能な漁業なり水産業、つまりホタテの養殖とか、あるいはナマコの養殖とか、あるいはハナサキガニの養殖とか、そういうようなことを双方で手掛けていけば良いのです。

いろいろ問題が起きてくるでしょう。会社はどこに登記しますか。当然4島には登記できないですから、例えばサハリンに登記したらどうかと。税金はどこに払いますか。それはちょっと知恵を絞らましようとか、いろいろそういうふうに本格的な経済交流に入る一步前の段階で、こういう取り組みを「つなぎ」としてやってみるのです。最終的な決着は当然外交でやらないといけないんだけど、その外交が動かない中で今何ができるかということを考えてんです。

(金平) 最終的には政治的な落ち着きどころですよ。今の考え方でいうと、本間さんが言っていたような自然遺産公園みたいなものの構想というのは、おそらく共同統治論みたいなね、もしかすると。そういうところじゃないと今のような形の落ち着きどころというのはないんじゃないですか。

(本間) どういうふうにそれを共同統治論的なものとか、共同統治論というのは言葉としてはちょっと古いような感じがするんですが、ある意味で「ビザなし特区を創ろう」というような取り組みというのは、ここを特別な形、つまりここだけ独立した形で何か新しいシステムをできないか。先ほどグリーンベルトということを行いましたけど、グリーンベルトの中でビザなし特区をつくれればいいじゃないかというような考えです。

(岩下) だから結局我々は知床を失い、ロシア、ウルップを失うというマイナスの発想になっちゃうんじゃないですか。



(本間) マイナスの方向にとにかく行くのではなくて、今何もできない中で次のステップに向けて何ができるかと前向きに考えて私は提案しているんですけど。

(中村) いろいろなお考えがあるでしょう。それではもう終わりの時間が見えてきまして、もう1時間もありません。会場の皆様からいろいろなお意見があろうと思いますので、ご遠慮なく何人かおっしゃってください。まず、どうぞ。

(会場から) どうも発言させてくれてありがとうございます。自分は北方領土返還運動をやっている者です。昔から日本は樺太、北千島まで施政権が及んでいて、本当は日本の領土なんだけれども、明治時代に日本の国力もあって北千島まで戦争しないで北千島までが領土ということだったんだけれども、むちゃな戦争をやって今までなっちゃったんだけれども、でも戦後一貫して四島返還だとか言ってきて、ソ連はそんなものは解決したんだと言っていたけど、一貫して言ってきて、本当にその努力が実ってエリツインのときに、ロシアになったときに4島まできたんだけれども、そこでまたそこまで来ていて二島返還だとか言って、岩下さんの悪口を言っているんじゃないんです。

全然違いますけど、岩下先生の話じゃなくて、あの鈴木宗男だとかそういうのが言って、そういうことで結局それはロシアは、これはいいわというもので二島返還から、そこから言わなくなったんだけれども、本来領土交渉というのは本当にマイナスなんか言うものでなくて、本当に本来は北千島までと言わなきゃいけないのよ。本当は戦争で日本の領土になったんですからね。本当はそこまで言わなきゃいけないんだけれども。

それと経済ね。経済、あのビザなしのときにもものすごい経済が悪いなど。これはものすごい日本の利益になるなど思ったんですけれども、本当に日本の、その北方四島へ行って、日本の領土なんだからね。さっき経済が行ったら主権がだめになるとかって、そんなこと絶対にないですよ。日本の領土だから日本の経済が行っていいんですから。日本の領土でない国に経済制裁をやるのと違うんですから、日本の領土だから日本の領土に入っていっていいんですから、経済が入っていい。

そして本当に日本の企業が行って、水産加工をつくったり、スーパーをつくったりだとか、道路とかいろいろやって、その島民を雇ったりしたら、本当にロシアの人たちも日本に返していいとなってきたんだけれども、今はもうロシアも経済的によくなってきて、でも今からでも間に合いますからね。いろいろロシアだってまだまだ経済的に分からない人はいっぱいいるし、これ



からロシアの人も経済的に望んでいる人もいるし、そこに日本の経済が入って行って、日本の経済がなかったら動かないようにすれば一番いいです。そうしたら本当に日本に返ってくるんです。

それと日本は、本当に国民が盛り上がりませんよ。北方領土返還と言ったら何か右翼団体がやっているような感じを受けて絶対にだめなんです。だから、あれは右翼団体なんかにはやらせていたらだめなんです、日本国民が盛り上げなかったら。外国にどんどん言わなかったら。外国の人たちに。外国の人が日本に来るでしょう。来賓だとか各市町村に。そうしたら必ず言うことなんです、北方領土のことだとか、そういう友好関係のある国の人に来たら必ず言って、北方領土返還というのをやっている人がそこに一緒になって北方領土返還のことを話して、そういうことをやって本当に世界に訴えていくことによって、世界の人たちも、ああ、そうなのかと分かって行ってロシアも返さなきゃいけなくなってくるんですけれども。

自分はラトビア共和国と友好関係をやっているんですよ。そしてラトビア共和国、その町の人が十何人来たときに今年、夕食会に行ったんだけど、そのとき自分は北方領土のことを言ったんですよ、ラトビアの人に。そうしたらラトビアの人は、いや、本当に自分たちも北東を取られているんだとか一生懸命、話をしたんだけど。北方領土のことを話していると言ったら、そんなこと話さなくていいと言って会場を出されたんだけど。だからそういうことが問題なんだから、もっと盛り上げなかったらいけないんです、そういうふうに。

(会場から) ありがとうございます。今日はこういう機会を与えていただきまして、この席です。おそらく時間がないだろうと思ひまして、このペーパーに私の主張、私の北方領土論というものを要約したものを書いてまいりました。ぜひ今日帰りの入り口のところで私、皆さんにお渡ししたいので受け取っていただきたいということが第1点です。

次に質問でございますが、鈴木さんにお聞きしたいんです。最近、北海道新聞に投書がありまして、四島返還の青写真を示しなさいという投書があったんです。つまり日本国民として北方四島返還運動がいつも集会の中で4島を返せという大きな声を絶叫するだけで、いったい解決策を何で示さないんですかと。こういう不満があるわけです。私もそのように思っています。私のお願いは、どうか解決が1日も早くなるように日本国民のために妥協する道を探して、四島返還でないスローガンに変えていただけないだろうか。それが日本国民に対する共同の責任の取り方だと私は思います。

それで例えばさっき講師の方々からあったんですが、2006年の4月に再構築提言書というのがありましたね。それから現在では長谷川根室市長さんが、根室と北方四島領域にビザなし特区をつくらうという提案がございました。これはもちろん講師の方が申し上げていますね。話してい



らっしゃいますが、こういうことを踏まえて、例えばもしも4島が返ってきたときに島民の方は向こうに移住するつもりですか。そしてもしそうであれば、日本の警察が行かなきゃならないだろうし、お年寄りを介護するための施設もつくらなきゃならないだろうと。これは大変な財政支出なんですよ。可能性としてはそんなことはないんじゃないかと。そういうときにどのように展開するんだろうかと。特に向こうではもういろいろな資産が現島民の私的資産なんでありまして、それについてはやはり保障するという行為が当然必要だと思うんですね。

そしてしかもビザなし訪問で訪問されている方が口々におっしゃっていますけれども、現在北方四島の開発計画というのは着々と進行して街は見違えるようになっていると。そしてここに大きなお金がたぎ込まれていて、着々と既成事実が積み上がっていますよと。それにもかかわらずそういうことを一切無視して、4島を返せという格好ではあまりにも無責任ではありませんか。私はそのように思います。お答え願いたいし、それから今後もeメールなどお互いにディスカッションをしたいという気持ちを持っております。今日このペーパーはぜひ受け取ってください。よろしく申し上げます。

(鈴木) 貴重なご意見ありがとうございます。あまり長くならないように言葉を詰めて答えたいと思います。まず島が返った場合に元島民は島に帰るのか。これは我々が返せと言っている以上は、自分たちが今平均年齢77歳、78歳になっていますから行けないとしても、2世、3世は必ずや行きます。ただ永住するかどうかについては、いろいろ長い期間も検討せざるを得ない問題も出てまいりますのでそこは今はっきり申し上げませんが、必ずや帰ると。

それから今、ロシア開発に絡んでロシアがどんどん開発している中で、4島を返せと言うのは無謀な言い方だというふうにとらえましたけれども、本当にそうなんだろうかとということをまず自分たちの目で直視してまいりたいと。私も毎年のように1回はロシアが今、港湾や学校や道路や、また開発事業を踏まえて島がそのようになっているのかということについては甚だ大きな疑問を持っております。

はっきり申し上げますと、あの島にいずれかの企業がいくつか入っています。その企業が動く、使うであろう道路を単純に直す。護岸をつくる。今よく言われていますのは、中国人も韓国人も、また北朝鮮も入っていると、こんなふうに言われていますけれども、中を詮索しますとそれは企業がサハリン州で雇い入れた中国人や北朝鮮を島に連れてきていると。ある一時期は、4,000人から5,000人の労働者が増えております。

ただ残念なのは、北方四島が日本人だけで居住していたころは1万7,291名という数字があったわけですが、今ロシア人の人口は1万6,000人くらいだと考えています。特に全体の扱



捉、国後、色丹の3島についてはかなりの人口が減っていると。やっぱり北海道と同じように、また根室市と同じように若者がどんどん流出している。出ていくと戻ってこない。残った年若い両親は、自分たちが元気なうちにいくらか手持ちの財産を売り払ってでも本国に引き揚げると、こんなふうになつております。

経済的にもかなり苦しいようで、果たして根室が唱える経済交流が可能なのかどうかということについても、その辺は多少障りがあるがあるなど、そんなふうになつて考えてございます。従つて我々としては直接外交の場の窓口になる立場にございませんので、返還についてはあくまでも4島の一括返還を唱えて、これからも返還運動に邁進するというには変わらないんだろうと。

それとよく最近みんなから言われますのは、島を切り売りするようなことだけはしてくれるなど。非常に簡単な言葉ですけども意味の深い言葉だと思つております。これは関係する内閣府も外務省もまず内政的な問題で処理できるものがあればするべきだというふうには考えますけど、あくまでも返還時に解決する問題だと今でも言い切つております。従つて我々はちょうど内政的な問題と外交的な問題のはざまに挟まっておりますので、もう一歩も引き下がることはできないというのが今の思いであります。よろしいでしょうか。

(岩下) どうして千島連盟が四島一括を下ろせないのか。要するに千島連盟が変わらない限り、政府が変わるわけもないです。千島連盟はこう言っていると言つて、下りられないということですよ。ところがよく考えてみれば最初鈴木さんがおっしゃったように、政府が何も2島とか、もういらぬとか言っていた時期から4つだと言っていたわけですね。

拉致問題と一緒にですよ。拉致問題は、みんな政府は冷たかつたわけでしょう。拉致問題を主張して政府がやつとその気になって交渉を始めてのものすごい苦節があるわけです。これも同じで、最初は4島と言つたつて、もう2島はサンフランシスコで放棄していますからというような話だったのが途中から逆に言うと国策になるんですけど、国策に関係なく出発点として孤立無援でも4つだと俺たちは言つてきたんだ。逆に言うとそれで国を動かしてここまで来たのに、言いだした俺たちが今さら下りろというのはそれはできないだろうという思いなんですね。ただ、こういう場で話されている話と舞台裏で話す話というのはまたいろいろ違いますので、私としてはなかなか言えないことを一生懸命、外で言つて回っているという役回りをしております。

(鈴木) 言い忘れたことがちょっとある。我々はあくまでも返還時については四島一括、耳をそろえて返しなさいよとは今現在言つておりません。ということは帰属の問題さえ解決すれば、返還時の対応については政府の決めたことに従います。こういう今言い方をしてございます。



ですから、当然ロシアの住民の方も4島にはそれぞれ今、生活をしていますから、そのことも考えればいっぺんに4つなんかどんなふうにやったって物理的に返ってくる仕組みにはなりません。従ってそういうことも含めて今、もし2島でも3島でも返る道があるんだとしたらどうぞおやりくださいというふうに逆に開き直りの発言もしてございます。



(石垣) 今、千島連盟からの話があり、それで本当に近くなったときに頻繁に外務省の課長も来た、欧亜局長も来た。月に何回も来ていました。そのときにそのたびに当時は千島会館で外交のお話を向こうがして、こっちのやりとりというのは頻繁にありました。そのとき今の話が出て、返還運動関係者、政府が今やっていることと四島一括の話が出て、外務省の立場はずっと一貫してそれは、どうぞ、どうぞ、四島一括でも、全千島でも返還運動の関係者というのはそれぞれのお考えはあるわけですから、それはどうぞやってください。

私も思うんですけれども、外交というのは外務省というか日本国の専決事項ですから、その外交が表に出さないでやることを運動者が2島でなんかだめだ、4島でなきゃだめだと言う必要も実はないと思うんですよね。そういう意味では先ほど来ありますように外交方針を立てて外交をしっかりとやってほしい、1日も早く島を返すようにしてほしいと、それのみであります。また私もそういう考えで国民運動としての返還運動を行っております。

それでちょっとさっきと違うんですけれども1点だけ、本田さんと本間さんが根室で密漁の話をお話をされたんですけれども、確かにその側面というのはボーダーですからボーダーの中でそういうことが行われたことも事実で、ここに『密漁の海で』という本がありますけど、これで



もそういう事態はありましたけど、本当は根室市は日本でもずっと一番の水揚げの町であります。それでほかの町に負けたことはありません。サケ、マスも一番でありました。昔、戦前は軍艦を出して日口漁業がサケ、マスを捕っておりました。

島を奪われてから根室の漁業がそれでも何でいっぺんに落ちなかったのかというと、当時の漁業者が北洋の海を開拓したからなんです。根室の基盤というのはその北洋の海と優れた漁労技術で今まで来ているわけで、密漁で生きてきたわけではないんですね。その辺だけしっかりして話だけさせていただきたいと思います。

(本田) じゃあ、今の話を言います。北洋サケ、マスも割当量以上かなり捕ってきたという歴史があるので、北洋サケ、マスもいわば密漁なわけです。そういう意味で密漁に支えられてきたということは言えるかなと思います。

もう1つ先ほど岩下さんがおっしゃった、元島民の方が4島とおっしゃっている。ここに書いてあると思うんですが、鈴木さんの肩書が千島歯舞諸島居住者連盟となっていますよね。なぜ北方領土居住者連盟じゃないのかということなんですけれども、これは北方領土という言葉がいつできたかということ、昭和39年でしたか。北方領土という言葉を使いなさいという通達が国の方からありました。なぜかということ、日本政府の今の立場もそうなんです、国後、択捉というのは放棄した千島に含まれていないというのが立場なので、実はそれまではずっと南千島と言っていたんですね。そこを南千島。この南千島が千島に含まれていないというのはいかにも具合が悪い。それで沖縄とか小笠原とか、そちらの南方のまだ返還されていない領土に対して北方の領土であると。それで北方領土という言葉を作ったわけです。

これに対してソ連は、歯舞と色丹を「マロクリル」、つまり「小さなクリル」と呼んでいました。要するに放棄したのは歯舞も色丹も入るんだというふうなことを言って、今も新聞の記事を見ると密漁船が捕まったというのを見ると、マロクリルとこういうふうに書いてあります。そういう意味で北方領土という言葉自体に、先ほど先に金平さんがおっしゃった国策というものが含まれているというのを意識しておいた方がいいかなと思います。

(石垣) 今、密漁の話があったので後に引けないので。確かにサケ、マス、ずっと4万2,500トンで来ていて、実際はどうなんだという話があります。だから、密漁の概念というのはいったい何かなということ、その辺でちょっと本田さんといつも雰囲気の違いのところなんですけど。

(中村) 先ほど本田さんがおっしゃった北方領土って、じゃあ、その前の千島はどうという。



北方領土の日というのが定まったのは1981年ですよ。今から30年前です。そのころから初めて北方領土という言い方になっていて、その前はやっぱりもうちょっと違っていただけですよ。岩下先生、何かほかにありますか。

(岩下) いやいや、竹島の日だって最近できたばかりだし、尖閣列島の日も最近できたばかりなので、言ってしまうとこういう問題はそういう問題でしかないから、もう固有の領土というような言い方も含めて見直して日本の領土であると言えばいいわけで、線をちゃんと決めましょうと、それでいいんじゃないかと。

(中村) それは私も個人的には大賛成です。さらに会場の方、どなたか。はい、どうぞ。時間が迫ってきましたので、なるべく簡潔にお願いできればと思います。

(会場から) 2点お聞きしたいんですけども、どなたからでもいいんですが、ジャーナリストである本間さん、本田さん、金平さんあたりからぜひと思っています。みんなにということではありません。私はアイヌ施策にかかわる仕事をしております。

先ほど本間さんからグリーンベルトとかというご提案がありました。それから共同の統治みたいな言葉も出てきたんですけども、北の方の歴史、アイヌ民族の文化とかに取り組む延長上に関心も持っているわけですが、解決の方策の1つとしてアイヌ民族も参画する共同の管理みたいなことは、利用とかというふうなことはあり得るんだろうなと思うわけですね。

意外と結構、効果的かもしれないと思いますのは、1つには何よりそこに先住していた民族であるという歴史的事実をしっかり踏まえることができるということですね。それから、膠着したかに見える状況がある程度、打開するインパクトある事態にもなり得るのかなと思います。というのは、伝え聞く限りロシアの側では先住民族の権利は無視するわけにはいかない。アイヌ民族の主張はある程度聞きましょうというような声も当局者からは表明されるというようなことも伝え聞いています。

であれば、それはこんがらがった糸をほぐすというか、あるいは膠着しているものを打開する1つの手掛かりになり得るんじゃないかなと思いますので、ぜひこれは注目して共同管理と申しますか、そういったことはぜひ今後大いに検討していただきたいなと思っていますところ。そういうことを言うことで国賊と言われる社会状況にしてはいけないんだと思うんですね。

それが1つともう1つ、それについてどう思われますかということと、もう1つはちょっとややきつい話になるかもしれませんが、外務省が出している北方領土に関する資料、結構厚



い「我ら北方領土」、少なくとも私が持っている 2009 年版には 200 ページぐらいある、もうちょっとあったかな、分厚い、結構濃い資料ですけれども、その中にアイヌ民族、アイヌ語という言葉がただの一言もないんですね。島の地名を説明して明らかにアイヌ語に依拠して説明をしている言葉の中にも、アイヌ民族とかアイヌ語とかというのは 1 つもないんですね。これは政権が変わってひょっとしたら 2010 年版、2011 年版が出ていたら変わっているのかもしれませんが。それは外務省の資料です。

片や内閣府、内閣官房が今もホームページにしっかりと掲げられていて審議が進んでいますけれども、政府の機関が歴史性を踏まえて一定の反省といたしますか、政策の誤りも表明しながら、今後アイヌ政策はこう進めるんだということを歴史認識も含めて表明している。そこにはある意味でいうと国内にダブルスタンダードがあるわけですね。

私はジャーナリストの方々と言ったのは、片や北海道新聞さんも毎日新聞も TBS もそうだと思うんですけど、そういったアイヌ民族の権利の問題については積極的にといたしますか、前進させるべきだという立場を取っておられると思うんですけども、こういう場になると一言もアイヌ語、アイヌ民族、それを踏まえて歴史性を踏まえて、あるいは権利主張していることを踏まえてこういう言葉でも考えるべきなんじゃないかというふうなことは一言も出てこないわけですね。そこにもジャーナリスト、あるいは研究者の世界にもダブルスタンダードがあるんじゃないかなと思うんですね。これは相手につけ込まれるわけですね、交渉でいえば。そういうことはやっぱり論理や倫理で一貫させて臨むということが私は大事なように思うんですけども、そういったことについてはどう思われますか。

(金平) 今の質問のようなものを待っていたんですけど、議論の大前提になる話なので、つまり領土問題は存在するのかなのかみたいなところから実は僕はだから一番最初に申し上げたことを言ったんですけどね。これは実は僕はモスクワから帰ってきて当時現地でまとめていた、ある人に出した手紙をずっと、1995 年に出した本なんですけどね。その中に僕は自分でそのことを書き付けているんですね。今おっしゃったことをね。エリツインが訪日延期になって領土交渉がこれでだめになるみたいなことが、そういう情報ばかり東京から求められたものですからね。

僕自身はそのときにこういう、あんまり長くないのでちょっと言うと、「僕は千島、アイヌモシリ説に触発されていろいろなことを連想している。何と言ったらいいのか、国境とか領土というのは大きな歴史の流れの中でいったい何なのだろうかという問いに近い。アメリカがコロンブスによって発見される以前に、かの地には人間、アメリカンインディアンが居住して当然大陸も存在していたのと同じように千島にもアイヌが住んでいた。コロンブスの役割を果たしたのは、おそ



らく江戸時代の松前藩とかロシア人測地学者、エブレイノフ、ルージン、彼らは1721年にクリル半島の探査実験を行い、原住民をロシア国籍にしたそうだ。とかいう人々かもしれない。

「国境は地図帳にあるように地図や海面に点線が引かれているわけではない。つまり人為的なものだ。その線を引くのは、あるまじくまた集団を国家として統治する権力の意志だ。権力は本質的に自己中心的に機能する。だからアメリカにたどり着いたという事実も、発見という言葉を使うわけだ。その権力同士の陣地取りゲームを領土交渉と呼ぶわけだ。そうすると法と正義なんていう言い方がいかにもうそっぽく聞こえる」と。

僕は自分でこのときに考えた気持ちというのは今も変わってないですよ。つまり領土とか国境というのは人為的なものであって、残念ながらそれは権力と権力がぶつかり合う、さっき波紋という言葉を使っていたけれども、そういうものだと思っているので、そこは現実的に考えなきゃいけない。アイヌの人たちのことを、この問題を考えるときに見ないふりをするという考え方というのは実は本当は日本政府にとっても僕らメディアの人間にとってもとてもよくないことだという意見については、本当に僕はおっしゃる通りだと思います。

それからもう1つだけ付け加えると、さっきから議論にそちらでなっていましたけど、千島に今現在3世代まで住んでしまっているという施政権が行使されているという現実の重みですね。これは、僕は残念ながらものすごく重いものだと思っているんです。僕は沖縄と対比するんですけど、沖縄の人は復帰しよう、復帰しようとして1972年に復帰しましたが、あそこは沖縄の人が住んでいましたよね。北方領土は今住んでないんですよ。

そこで生まれ育った人たちが3世代にわたって暮らしをつくって、それから私的財産権みたいなものも所有するようになったときに、つまり同じようなレベルで本来あの領土は日本のものだというふうにして、出ていけということと言う根拠というのが、さっき言った国境というのはもともと人為的なもので、権力と権力がぶつかり合うところに引かれたものだという考え方に立てばですよ。僕は理想論を言っているんですけど、本来はそういうふうには思わない。外交はそうじゃないからそうじゃないところで動いていくということはあるんですけど、そういう考え方に立つとその重みというのは僕は無視するわけにはいかないと思うんですね。旧島民の方を前にしてこういうことを言うのはとても僕は自分の中でじくじたるものがあるんですけども。

そのためには僕らは、やっぱりメディアの仕事はさっきのアイヌの人たちの存在も含めた意味で、現地で今どういう生活が営まれていて、本当に彼らはそこにいたいのだろうか。それから僕らの方も、さっき2代、3代の人たちは戻るといふふうには言っていましたけど、僕らは考えてみて今の自分たちの子供、孫、その次の世代の人たちは今のような日本の在り方で本当に北方領土に行こうとするんでしょうか。生活を営むと思います？



僕はそこが実は自分の中で何とも自問しても答えが出ない。特に今年は答えが出ないというか、日本がこんな状態になっちゃったからなおさらなんですけれども、何か状況の変化とか、そういうことを踏まえながら、やっぱり僕らの考え方というのも変えていかなきゃいけない。もっとリアルな現状認識というんですかね、そういうものを持たないとだめなんじゃないかなという気がするんですね。

(岩下) メディアの方に対する質問なので私は答えなくていいかなと思ったので、最後に研究者と言われたので、あ、答えられるなと思いましたが、交渉から言えばまったく逆だと思います。つまりそれは金平さんも違う言葉でおっしゃいましたが、国家と国家の交渉です。つまり尖閣列島の問題に台湾は交渉として入れないんです。つまり台湾でさえ交渉に入れないという現実というの、まったく国際的な交渉というのはその主体は何かということに関してはものすごく厳しいものがあるというのがまず前提です。

2つ目は、私は固有の領土はないとずっと言っていたつもりなので、もう少し平成の国賊らしくはっきり言おうと思うんですが、要するにオリジナルな日本という、固有の領土じゃないですよ。オリジナルな日本、大和というと「中の文化」だけです。そこから広がっていったわけです。

これはもう近現代史以前の専門家はみんなそう思っているわけですが、近現代史以前の専門家は近現代のことを言わないんです。我々の歴史は明治維新から日本が途中から外に出ていくようになったと言いますが、元来的に言うとオリジナルな日本から考えたら、どんどん広がっていったわけで、そうすると日本の国家が何なのかという話ですね。我々の憲法は民族共生とか多民



族なんかまったくないわけです。そういうのがあるから単一民族幻想みたいなものが裏返って生まれるので、まずは日本の国の在り方みたいなことを先住民の問題をやるのが先で、逆に言うとそれをやらずに北方領土問題にアイヌの方のを持ち出すというのはかえって私は見ないふりをしているのではなくて、逆にそれは利用するだけでよくない。まずは我々の問題として考えて向き合うということが先決であるから、私はそのことを言わないだけであります。我々の活動はそういうのは別のところでやっております。

(中村) 会場からおっしゃった先住民族アイヌのことについて言えば、亡くなられた萱野茂さんにごく親しく私はさせてもらってました。いろいろなお話を勉強させられました。その中に波紋、小さな池、水たまりに石を投げる。そうするとこう広がっていきますね。広がっていくのをアイヌ語で「ペシ」と言うんだそうですね。その波紋、広がっていくものが緩やかにどんどん遠くの方に行くとなっていくことをしっかり認めて、いろいろな話し合いに我々も入れてほしいということを萱野さんから言われて、私はラジオ番組にそういうのを1つつくったことがありました。いろいろな思いがあって今、金平さんがおっしゃること、あるいは岩下先生がおっしゃることとまったく共通ですが、先住民族に対する思いは常に持っていなければいけないというふうに思っています。

鈴木さん、今、世代がどんどん変わっていく中で、旧島民の方々はこれから先もやっぱり父祖の地へという思いに変わりはないんでしょうかどうかというところをもう一度いかがですか。

(鈴木) 今やっぱり返還運動についてのみ言えば、後継者育成というのは4世代まで広げておりますので、当分の間は国がはっきりした姿勢を示さない限りは今の状況が続くんだろうと思っております。従って今の政権もそうですが、ロシアとの領土問題解決に向けた政府の姿勢というのは、ある意味では信用の置ける長期政権になってほしいというのは我々の願いです。

(本田) 今、北方領土に日本人が住んでないということなんですけれども、これは1947年から1949年にかけてソ連政府から強制退去の命令を受けて追い出されたわけですね。だから元島民の立場になると、住んでないから返還運動も盛り上がらないとか関心も薄いと言われると、それこそソ連の思うつぼじゃないかというふうな感じですよ。ということだと思います。

(石垣) まさにスターリンの粛正と、それと浄化によって今、北方領土に1人もいなくなった。みんな真岡の女学校の上に上げられて、残った人はそれはひどい思いで強制送還をされた歴史的



事実がありますのでまさに今、本田さんが言われたことは大事なことだと思います。よろしくお願いいたします。

(岩下) 何か歴史の話をしましたけど、私はもう歴史の話をするとお互いにこっちもサハリンに対していろいろやっていますし、もう歴史の話はそれはそれでやってもいいですけど、もうちょっと未来に向けた解決法を考えるのがいいんじゃないかと私はいつも言っています。

(中村) 岩下先生がずっとご持論にされていると私は理解していますが、日本という島国でいけばすべて国境ですよ。ボーダーですよ。この中でやはり北方領土問題ということに特化するだけじゃなくて日本のいろいろなところ、それは尖閣もあるでしょう。いろいろなことがあるじゃないですか。そういう中でこれから先、世界の中の日本という国のありようとして、国の姿、形としてどういうのが一番いいのか。この辺はいかがですか。

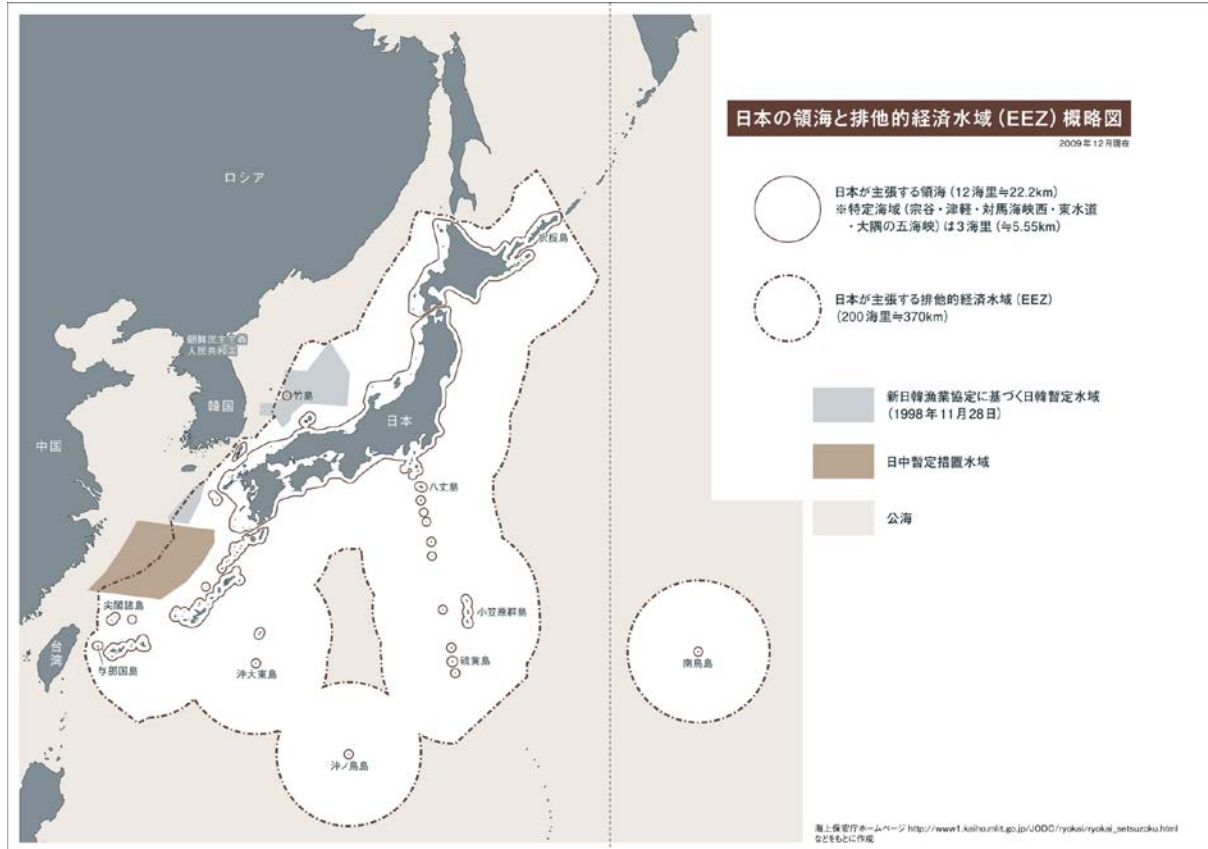
(岩下) 日本の国境の全体図、海保の地図を出してください。思うんですけども、今までは戦争に負けて島に引っ込んで、自分たちは本当は単一でもないのに1つだというような感じで、境界の島の方は見なかった。この地図じゃないですよ。この地図が一番広がった日本で、危ない地図ですから。注釈をせずに見せると、あいつはそれをもくろんでいる。これが今の姿。さっきのは日本の一番広がった姿で、戦争に負けてこの姿になったときにあんまり境界のことを考えなかったんですね。

それでさっきも言いましたように日本海側はほとんど決まっていないということで、そのころはそれでよかったんですけど。ただ200カイリ、EEZとかという話が出て、海が広がっていくということがあるのと、当時はユーラシアの陸地の方が紛争が激しかったですね。ロシアと中国とか。ところが最近はそのちの方が落ち着いて、みんな広がった海に向かって、技術も発展したし、海も掘れる、エネルギーも掘れるというので向かってきている。

ところが、その海をどうやって秩序付けるかというのは条約はあるんですけど、解釈も違うし、入ってない国もあるということで、どちらかというとな力勝負みたいな状況になっている。そういう意味では今まで平和だったんだけど逆転して、海に囲まれていてしかもその境界がはっきりしていないが故に日本はすごいチャレンジになっていて、しかも竹島とか尖閣とか比較的あまり今まで議論していなかったところほど議論になりやすい。逆に北方領土はもう議論し尽くしているわけですね。だから私は、北方領土問題を解決することから始めれば、もう議論のしようがないぐらいやっているわけです。ほかの日本の境界にとってもきっとプラスなことが生まれてく



るんじゃないか。そういうふうにつくっていないと日本の将来はないと思っています。



『日本の国境・いかにこの「呪縛」を解くか』(北海道大学出版会) より

(本間) そうですね、そういうふうというのは非常に難しいと思いますが、私は常々定点観測して思うのは、北方四島はこれまで「モノクロームの世界」だったんですよ。もう白と黒の世界、あるいはセピア色の世界。それがここ何年かで塗り替えられている。ロシア色に。日本の固有の領土が、日本の固有の領土なのにロシアの手によってロシア色に塗り替えられている。この状況というのは非常に悲しいんですよ。

特に択捉新空港というのがあと2年後に第1期工事が終わって飛ぶようになるんですね。そうすると一番怖いのは韓国の仁川空港とのチャーター便あたりができて、それが定期航路になって、ということになったらひょっとすると羽田、仁川、そして択捉みたいな観光客が入ってきちゃうんじゃないのかなという、これが一番怖いんですよ。それはこれまで積み重ねてきたビザなし交流が形骸化することでもあり、そもそもみんな行ってみたいんですよ。簡単には行けないから。世界の人たちも行くとなると、日本人もいてもたってもいられなくなる。閣議了解なんか無視してロシアのビザを取って、ということになると非常に怖い。



世界中であとどこが行けないかという、もう南極も行けるようになる時代ですから、やっぱり日本の国土でなかなか行けないところへ行きたいということになるでしょう。そうなったときに、もうなだれのように日本人がツアーで行くようになる。この悪夢だけは避けたい。じゃあ、どうすればいいのかということなんですよね。

(岩下) なだれのように行って実効支配したらいいじゃないですか。

(本間) なだれのように行ってみんなで住み込むっていいですね。

(会場から) 私は札幌で今、住んでいます、アイヌの問題は北方領土という言葉は本当は聞きたくない。だけど現実になっちゃったんだから、私はこれで平和的に解決したいと思っています。今年の6月に、北方領土を平和管理することを提案する国会議員が記事を出していました。ロシアの国会議員だよ。

この人の記事を私は読んで非常に感動して、すぐ自分で下手くそな字で記事の下に自分の考え方を書いて札幌の領事館に飛んでいきました。そうしたら領事館の方で、アイヌの人がこういう提案してくるということについては素直に受け入れるし、日本の領事館を通して本国にも伝えますと言ってくれました。ですから、こういうアイヌが前面に出ていくことは誰も反対も出ないし、北大の先生が利用するのはしたくないと言いましたね。

もう1つ、いいかい、聞いて。北海道大学の中に、アイヌの人骨が1,004体も今あるの。その中に千島列島の人骨が51体、サハリンの樺太のアイヌの人骨が91体。こういう実態が現実起きていて、私たちはこういう人骨の問題も領事官に言いました。そうしたら、こういう問題と、自分たちは千島列島で墓守をしたいと言いました。こうして連動していく運動でないはずだと私は思うんだ。自分の思いの丈を言いましたが、終わります。

(中村) どうもありがとうございました。十分参考にさせていただいて、こういう機会にいろいろなお発言が皆様方からウエルカムで出てくるということですから、それ自体がいい会ではないかなと思いますが、岩下先生、いかがですか。

(岩下) まったくその通りで、私たちが企画する会は常にオープンで、どういう議論も向き合おうということでやっておりますので、うれしく思います。



(会場から) 根室出身の岩見沢の女です。短く言います。1つ、北方領土の言葉が昭和41年とかと言ったんですけど、根室に看板が立ったときに「返れ北方領土」と立ったんですよ、鈴木さんね。私はびっくりしたんです。「返せ」でないかと父とけんかしたんですけども、出だしはそんなスタートだったということを皆さんに知っていただきたいと思います。

2つ目、壇上に女性がいたらいいなと思いました。私が座りたいというわけではございません。高橋はるみさんにアプローチしたらよかったんじゃないですか。どうせみえないと思いますけれども……

(会場から) お聞きしていて一番感じたことは、元島民の方たちが強制的に追い出された。その権利を不当だと。それから漁業をやっていた人は漁業をする権利を奪われたということを含めて主張して、ソ連なりロシアにその権利を回復せよという運動はできなかったんでしょうか、ということですか。

(鈴木) どうもありがとうございます。それは昨日おととい、漁業権問題、これは北方四島全体を含めてやっていたけれども、この問題についても政府は今北海道にも強く要請をかけております。この問題が走ってからかなりの時間がたっています。ただやっぱり先ほど私が申し上げたように、返還時に解決すべき問題だというふうに国から言われていますので、それ以上前へ進んでいません。

ですから、確かに先生が心配するような形のものがまだまだあるんですけども、本当に我々に言わせると、今日ロシアの方も見て甚だ言葉は不適切な言葉を使うと思いますけれども、恨みつらみは数たくさんございます。北方四島であった犯罪的な問題も含めると、私の島だけでもまだ未帰還者が4名おります。これはもう強制労働に連行されて、9月の中すぎにいずれかの島に連れていかれたまままだ帰っておりません。そういう問題もありますので、なかなか元島民の方々も自分たち自らそのことを訴え出ようというのは難しい環境にあります。以上です。

(中村) 今日は、長い時間本当にありがとうございました。進行が不得手でありました。申し訳ありませんでした。会場の皆様が心を1つにされる場所もあったと思いますが、いろいろなことでそれぞれ境界を越えていろいろなお話ができたように思っています。こちら側にいる我々も十分にまた心してこれからも勉強してまいります。どうもありがとうございました。(拍手)



境界地域研究ネットワークJAPAN 設立特別企画

Japan International Border Studies Network

2011.11/27日

札幌エルプラザ 3Fホール

札幌市北区北8条西3丁目
<http://www.danjo.sj-plaza.jp/>

笹川平和財団助成プロジェクト



激論 北方領土問題 現場からの眼差し

北方領土問題が「危機」的な状況を迎えている。これまで様々な特集番組や討論番組が作られてきたが、政府交渉の経緯を追ったものが多く、現地の声や根室からのイニシアティブを踏まえて制作されたものはあまりない。この企画では、札幌を始めとする道民にもまだ知られていない、北方領土隣接地域(根室管内)や元島民らの「闘い」の歴史を振り返るとともに、これらローカル・イニシアティブのあり方を検証することで討論を行う。

司会

中村美彦 (フリージャーナリスト・HBC「一筆啓上」「無頼放談」キャスター)

予定パネリスト

岩下明裕 (北海道大学スラブ研究センター教授・討論コーディネーター)

石垣雅俊 (根室市副市長)

本田良一 (北海道新聞函館支社報道部編集委員)

本間浩昭 (毎日新聞北海道報道部・根室 記者)

金平茂紀 (TBS報道局記者・キャスター)

鈴木寛和 (社団法人千島歯舞諸島居住者連盟副理事長)



境界地域研究ネットワークJAPAN結成にむけて
我が国は周囲を海に囲まれ、無数の離島を有していることもあり、境界に関わる諸問題を長い間強く意識することがありませんでした。他方で、アジアの海域をめぐる係争は緊張の途をたどり、境界・国境地域を安定させ、持続的に発展させることが急務となりつつあります。私たちは2007年から与那国、小笠原、根室、対馬などで「国境フォーラム」を開催し、境界地域をめぐる実務者間の意見交換や交流の場を構築してきました。この度、これらの活動の成果のもとに、アカデミズムと実務の間の境界地域研究に関するネットワークづくりに踏み出すこととなりました。これを通じて境界地域を活性化するアイデアやプランの創出が期待されます。また、国内の内向きな議論に始終せず諸外国や欧米の研究ネットワークと広く接合し、緊密に協力し合い、大きな視野での問題解決や地域発展に寄与することも構想しています。

13:30 開場

14:00~16:15 討論会

16:30~17:00 境界地域研究ネットワークJAPAN 設立セレモニー

入場無料
申込不要

主催 北海道大学 グローバルCOEプログラム
境界研究の拠点形成
北海道大学
スラブ研究センター

後援 公益社団法人 北海道国際交流・協力総合センター

お問い合わせ
札幌市北区北9条西7丁目
北海道大学スラブ研究センター内 GCOE事務局
Tel: 011-706-2380/4809 Fax: 011-706-4952
E-mail: info@borderstudies.jp



<http://borderstudies.jp/>



引き続き行われた JIBSN 設立セレモニー



来賓あいさつ



設立宣言のお披露目



ライブ・イン・ボーダースタディーズ No.9
JIBSN設立 特別企画
「激論 北方領土問題 現場からの眼差し」

編集者： 岩下明裕

協力： 合田由美子

発行日： 2012年2月29日

発行者： 岩下明裕

発行所： 北海道大学スラブ研究センター GCOE 工作室

〒060-0809 札幌市北区北9条西7丁目

電話 011-706-2380 FAX 011-706-4952

URL <http://borderstudies.jp/>